京　都　府

1・2〔2・6〕 画家　狩野永岳没（享年78、東山泉涌寺に葬る）。　平安名家墓所一覧

2・5〔3・10〕 幸野梅嶺、柳馬場六角上ル槌屋町に独立し堂号を六柳北圃と称す。このころ私塾を開業。　楳嶺遺墨

4・22〔5・25〕 画家　中林竹渓没（文化13尾張生、真如堂に葬る）。　京都名家墳墓録

4・1　中村水竹、明治天皇の御名璽を刻る。　書道全集 25

5・16〔6・18〕 浮世絵師　速水春眠没（裏寺町光徳寺に葬る）。　平安名家墓所一覧

7・一　表具師　8代奥村吉兵衛没（号樫所、鶴心堂、蒿庵、享年64）。　淡交テキスト茶道具編

7・一　川村仁兵衛（細工）・田辺勘右衛門（錺工）、上醍醐準胝観音堂釣燈籠を製作。　日本鋳工史

8・一　望月玉泉、金屏風「萩に臥猪」・「藤に熊図」を描く。　名家歴訪録

11・28〔12・23〕 銅版彫刻師　初代玄々堂松本保居没（天明6京都生、享年82、東山霊山の招魂社墓地に葬る）。　日本銅版画志

11・一　富岡鉄斎、『宣興壺譜』・『文房清約図』・『桑苧遺韻』出版。　富岡鉄斎の研究

11・一　望月玉泉、准后里御新殿御用の「山茶梅戯犬図」を描く。　名家歴訪録

12・一　中村水竹、大日本国璽を刻る。これは王政復古を諸外国に布告するのに用いられた。　書道全集 25

この年

▷　秋　石田有年、明治天皇即位の際、御用の屏風金地六曲に極彩色「若竹に鶏」・「菊花に鶏」の画を揮毫。　日本銅版画志

▷　岸竹堂、金地屏風に「虎・獅子図」・「松に鷹図」を描く。　京都美術協会雑誌 50

▷　桂淡水、「増補掌中唐宋詩学類大成」を銅版製作（巻首に2代玄々堂松田緑山の序図がある）。　日本銅版画志

▷　初代伊東陶山、はじめて祇園に店を開き酒器茶具を販売、陶山焼ようやく有名となる（それまで陶山は五条坂の亀屋旭亭・尚調和軒与兵衛・3代高橋道八・村田亀水・幹山伝七・粟田の帯山与兵衛・一文字屋忠兵衛・岩倉山などに陶法を学び、また参考のため昔のすぐれた作品を収集）。　京都工芸大観

▷　初代三浦竹泉、13歳で3代高橋道八に入門（17年間修業）。　同上

1・4〔1・28〕 2代玄々堂松田敦朝、太政官会計局の命により太政官札の彫刻印刷を二条城内で着手（明2・5まで門弟多数を指導して金札4,897万両余を完成）。　日本銅版画志、印刷100年の歩み

2・一　この月以降、山中信天翁・横井小楠・小野湖山・江馬天江らがあいついで徴士を拝し太政官に奉職。そのため公私に広く用いられていた御家流の書法は廃れ、唐様の書法が流行。　書道全集 25

4・一　中村水竹、印司に任ぜられ諸官庁の印を刻る。　同上

10・20〔12・3〕 井上大丸、島原遊廓の守護として祭られていたえびす講に、針止人形と称する人形飾（能狂言の内、安宅関所場面）をはじめて同店に展示（以来大5～13まで中絶し、昭10ころまで毎年歌舞伎芝居の場面を製作）。　近代友禅史

11・28〔12・10〕 松田龍山、「大神宮遷御之図」を銅版製作。　日本銅版画志

11・一　安部井櫟堂、印司に任ぜられる。　書道全集 25

12・8〔明2・1・30〕 画家　海北友樵没（享年52、寺町今出川北十念寺に葬る）。　平安名家墓所一覧

この年

▷　銅版彫刻師　橋本澄明、「懐寶京都細絵図」を銅版製作。　日本銅版画志

▷　宮川香山、備前伊木長門に招かれ同所虫明窯の製造を指導（翌2年京都に帰る）。　京都美術協会雑誌 1

▷　田能村直入、京都御幸町四条上ル北村庵に寓居を定め、画室幽谷斎を設ける。　直入居士伝

▷　人形商　3代越後屋庄三郎没（文化5京都生、名宣貞、商号芦田屋）。　京洛人形づくし

▷　如雲社設立（慶応2、土佐光文・鶴沢探真・狩野永祥・原在照・吉村孝一・国井応文ら創設、新古書画展覧を開催、明治初年後素如雲社と命名、毎月11日研究会を開催）。　日出 明29・1・28

▷　富岡鉄斎、このころから百錬の号を用いる。　富岡鉄斎の研究

▷　桂宮家の入札が行なわれる。　温知考

参　考

慶応3年改刻版『平安人物志』による美術工芸家

書　家

岡本　保誠	書博士号慶恪	上賀茂
岡本　清谷	字号	上賀茂
岡本　氏臣	字号	上賀茂
畑　　纜	号梅洲又三猿舎	聖護院西台刀居前北
村井　忠臣	字号蔦迺舎	西六条
木村　行納	号	新町蛸薬師南
鳥居小路経孟	字	粟田
山田勘解由		粟田堀池町
福井　應一	字仲貫号楳莽	高倉三条南
森　　顧	字玄輔号石華	寺町高辻北
池田　正義	字明郷号東園	寺町五条北
桂　　主馬	字	中立売烏丸
四方　在延	字子善号黙山	六角柳馬場西
秋岡　倫茂	号	今出川室町西

文人書

田辺　真之	号寿山	城西
上羽　元瑞	号如玉	松原柳馬場
大亦　元韶	字九成号黒隠	衣棚御池北
今小路行巽	字君朋号赤城	大仏
貫名　海雲	字孔有号海雲	下鴨
三井　高基	字号南陽	油小路二条
草間　時寛	字号静水	城西
不破　清直	字温郷号松寓	城西
山口　碧海	出文人画部	

篆　刻

羽倉　　信	字子文号可亭	伏見稲荷
中村　元祥	字爾祥号水竹	西洞院中立売北
安部井櫟堂	字大介号芥丹	富小路二条南
駒井　　寧	字靖質号静文	寺町高辻北
小嶋　彫嶺	出細奇工部	
小林　卓斎	字公秀号卓斎	高倉竹屋町南

画

土佐　光文	字子炳号韓水	寺町丸太町
土佐　光章	前人男	
土佐　光武	字	寺町丸太町南隣
鶴澤　守照	号	下長者町千本東
岸大路　禮	字士弟号北鵬	伏見寓
岸　　誠	字号三峰	東洞院丸太町南
岸大路　愼	岸禮男	
原　　在照	字号観蘭	中立売室町東
梅戸　在親	字号臥竜	小川中立売北
多村　久成	字仲巽号擧秀	高倉夷川北
下村　一幸	字号東花園	東木屋町二条南

（明2へつづく）

日　本

慶3・2・27〔4・1〕 この日開かれたパリ万国博覧会へ開成所画学局の高橋由一・宮本三平らの油絵、北斎・国貞・芳幾・芳年らの浮世絵・銀象牙細工の小道具・青銅器・磁器・水晶細工などを出品（～10・4まで）。

明1・3・28〔4・20〕 新政府、神社が仏教語を神語とすること、仏像を神体とすることを禁止（神仏判然令）、以後排仏毀釈の運動おこる。

4・12〔5・15〕 独人ゴットフリート=ワグネル来日（以後日本の工芸界の発展に大いに尽力）。

10・28〔11・23〕 大阪に舎密（せいみ）局を設立、のち大阪理学所と改称（明3・4・3）。

この年

▷　江戸の商人　瑞穂屋卯三郎、パリ万国博視察から帰国。西欧の進歩した窯業技術、特に石膏型の応用技法をはじめ、染付に用いる酸化コバルトなどの新しい絵付顔料を持ち帰る。竹本要斎・服部杏圃がこれを実際に使用。

京　都　府

３・13〔４・24〕 画家　日根対山没（文化10京都生、享年57、黒谷に葬る）。
平安名家墓所一覧、京都名家墳墓録

４・７〔５・18〕 府、勧業方を設け勧業事務を取扱う。　府史勧業類

５・一　蟹川式胤（のりたね）、弁事官より制度調査掛を命ぜられて東上。　陶器大辞典

５・一　仁和寺・大覚寺・勧修寺の位階官名を画工などに授けることを禁止。　太政官日誌

５・一　中村水竹、印司を辞し九翁と号す。
書道全集 25

７・２〔８・９〕 浮世絵師　梅川東挙没（名重寛、初号東居、享年42、黒谷に葬る）。
日本銅版画志

８・４〔９・９〕 ２代玄々堂松田緑山、太政官楮幣局（のちの内閣印刷局）の用命で東上するよう達せられる（９月東上、官札を翌３・10まで製造）。　同上

10・４〔11・７〕 智積院南の智山勧学院焼失。
京都坊目誌

10・一　竹工　８代黒田正玄没（幼名熊吉、享年61）。　淡交テキスト茶道具編

11・一　西陣物産会社、油小路元誓願寺南入ルに設立（勧業資金の色彩の濃い、天皇より府への下賜金15万円のうち、３万円を借りて設立されたもの。維新後の西陣織屋・仲買商の失望落胆と、粗製濫造に陥っている貧窮織工の救済および織物の改良などを目的とする）。
西陣織物同業組合沿革史

この年

▷　今尾景年、家塾を開く。　景年画歴

▷　３代高橋道八、鍋島藩の招きに応じ有田上幸平の指導所で京都風の技術（手轆轤・楽焼・錦窯の改良など）を教授。　陶器全集、有田陶業史

▷　２代松風嘉定、陶器をはじめて横浜から海外輸出。　陶磁器業者に関する取調書

▷　青木宗兵衛３代金花山、薩摩焼の製造を試みる（失敗）。　陶器大辞典 1

▷　明山初太郎、湖東焼再興を計る彦根藩のお抱えとなる。　湖東焼の研究

▷　富岡鉄斎、西園寺公望が立命館を開くに当り招かれてその教員となる。　富岡鉄斎の研究

この年ごろ

▷　田中利七、従来は一種の趣味にすぎなかった押絵の図案を改良（これを屏風・扁額にあてはめ、のち欧米に輸出）。　京都美術協会雑誌 56

▷　野村文挙、塩川文麟の門に移る。
日出 明44・1・27

▷　堀内家茶室・玄関・表門完成（設計者　堀内仙鶴ほか、和風）。　京都の明治文化財

▷　熊谷直彦、東京へ移る。　絵画叢誌 309

２・一　石田旭山、「東京細見の図」を銅版製作。
日本銅版画志

５・５　久美浜県庁舎（現、久美浜簡易裁判所・久美浜区検察庁庁舎）完成（明２・20 着工、設計者は棟梁高橋豊助および又平、和風）。
京都の明治文化財

５・23〔６・21〕 ５代伊達弥助、養蚕にすぐれた成績をあげ府から褒状を受ける（田舎絹の発展により西陣に入る原糸の減少を解決）。　西陣史

６・８〔７・６〕 蒔絵師　４代山本武光没（享年56、真如堂に葬る）。
京都美術協会雑誌34、京都名家墳墓録

12・22〔明４・２・11〕 府は理化学教育とその応用により殖産興業をはかる目的で、舎密局仮局を河原町二条下ル勧業場に設置、開業（主任明石博高の開業祝辞「大政維レ新ニ文明ヲ称シ開化ヲ唱フルハ輿論ノ基ク所ニシテ彼ノ欧米諸邦ノ文化ナル所以ノ者ハ蓋シ舎密窮理ノ学術開闡ニ根拠スレバナリ今ヤ京都ハ聖上御東幸一千載ノ華洛モ一朝凋然萎靡シ瞻ルニ堪ヘザル在リ若シ都民ノ自適ニ放任シ看過センヤ後チ復タ救フベカラザランヤ本府茲ニ見アリ百治励策ヲ講ジ大ニ尽スアリ又生ヲシテ舎密窮理ノ学事ニ関ラシメ都民ヲ教導スベキヲ命ズ因テ生ガ歴年経ル所ノ器具典籍ヲ挙ゲ舎密局開設ノ議ヲ申稟シ既ニ本日京都舎密局仮局開業ニ及ベリ都下ノ万衆ヨ明府ノ誠意ヲ了シ来テ斯道ノ要ヲ需メ知識発達ヲ図リ産業隆昌ノ域ニ至ラン事ヲ」）。　明治文化と明石博高翁

この年

▷　２代玄々堂松田緑山、「銅鐫懐宝皇朝海内全図」・「銅鐫大日本北海道全図」を銅版製作。
日本銅版画志

▷　錦光山宗兵衛、彩画顔料の新法を発明（粟田焼は外人嗜好に適するよう彩画顔料の法が研究され、大いに内外の好評を博するようになる）。
京都美術協会雑誌 19、日出 明22・11・22

▷　２代松風嘉定、神戸の仏人と陶器貿易を行なう（販売高450円）。　陶磁器業者に関する取調書

▷　初代宮川香山、薩州の用達梅田半之助の縁故により海外輸出向陶業を開くため、横浜久良岐郡太田村へ移住（当地で京都から４名の門弟を招き陶窯を築く。翌４年薩摩焼を模して外国人向け陶器を製造）。　京都美術協会雑誌 1

▷　岸竹堂、絹本直幅「富士山麓野馬図」を献上、また金地御屏風「桜に馬、秋草に猿図」および「桜楓の図」調進を命ぜられる。
京都美術協会雑誌 50

▷　西本願寺の入札行なわれる。　温知考

▷　はじめて友禅染の有志団体井筒社（箔喜ともいう）、西洞院三条上ルに設立（組長　図帰喜兵衛）。　近代友禅史

▷　金工　荒木東明没（文化14生）。
京都の美術工芸100年展目録

参　考

（明１からつづく）

嶋田　雅喬　字子秀号桃嶺　釜座二条北
中嶋　来章　字子慶号鶴江堂　柳馬場御池南
吉村　孝一　字号　西六条
長澤　芦鳳　字貫夫号　八坂枡屋町
円山　應立　字子道号方壺　姉小路両替町
高倉　在孝　字子止号後素　六軒町一条北
小川　芦汀　号　一条室町西
蒲生　敬　字惟長号竹山　西六条
柴田　利壽　字士静号仙溪　東洞院夷川北
藤村　祐則　号春汀　山科
原田　篤　号飛蝶亭　北嵯峨
紀　精斎　再出
沢渡　廣孝　字子敬号素軒　精斎男父同居
中村　祥　字子善　室町松原南
木村　信　字成徳号玉帯館　柳馬場五条北
竹邨　徳　字操夫号蟹谷　堺町三条北
津田　信徳　字号　新町今出川南
吉坂　雅言　号鷹峰　岡崎
中嶋　有章　字号　来章男父同居
勝山　仲章　字士燠号　間ノ町二条北
泉　保　字子誠号春園　一条室町十文坊辻子
谷口　重安　号華明　室町一条北
中嶋　富壽　字質文号華陽　聖護院村
武沢　揚岸　字高泰号風清斎　大宮一条南
岡本　亮彦　字子朗号暁翠　堺町四条北
岡本　常彦　字確乎号菱邨　木屋町四条南
鈴木　世壽　字子廣号大年　四条高倉西
鹽川　文麟　字士温号雲章　木屋町四条三丁南
林　有孚　字之吉号蘭雅　塔之壇
森　義章　字子成号季卿　両替町三条北
木村　信篤　字子敬　四条柳馬場西
田辺　道重　字士遠　間之町魚棚町北
樋口　翠江　字士慶　東六条
佐々木耕栄　字長輔号藍水　洛東八坂
八木　致恭　字子謙　衣棚御池南
海北　友樵　字如聞号柳塢　塔之壇
中川　韞　字士玉号笙嶼　仏光寺柳馬場西
早藤　春英　号不盡庵　西川端四条北
栢　叔信　字雅扇号友鷹　東中筋五条南
林　成章　字父燠　十文字辻子
長谷川長盈　字士進号　柳馬場三条北
有山　旭峯　字　油小路御池南
藤木　公徴　字典礼号霞溪　諏訪町五条南二丁

（明４につづく）

日　本

明２・２・１〔３・13〕 漆工　玉楮象谷没（文化４生、享年63）。

７・２〔８・19〕 金工　加納夏雄、大蔵省造幣局に出仕、新貨幣の雛形の彫刻を命ぜられる。

この年

▷　川上冬崖、東京下谷和泉橋御徒町にわが国最初の洋画塾、聴香読画館を開く。この門から小山正太郎・松岡寿・中丸精十郎・松井昇・印藤真楯らが出る。

▷　国沢新九郎は藩命を受けて渡英、ジョン＝ウイルカムに師事し西洋画法を学ぶ。

明３・１・８〔２・８〕 蒔絵師　中山胡民没（文化５生、享年63）。

４・一　長崎在住のワグネル、佐賀藩の委嘱により有田に赴き、酸化コバルトを利用して磁器の改良に尽力。

５・21〔６・19〕 画家　鈴木鵞湖没（文政１生、享年53）。

５・一　小曽根乾堂、宮中桜の間で大日本国璽、天皇御璽の純金印２顆を刻る。

７・一　川上冬崖、大学出仕図画御用掛となる。続いて文部中助教に任ぜられ図画教育の調査にあたる。

10・一　河鍋暁斎、上野不忍池畔三河屋に開かれた其角堂の書画会に、西洋崇拝を痛罵した諷刺画を描き投獄される。

この年

▷　洋画家　川村清雄が渡米（のち仏・伊に留学）。

▷　菊池容斎、米国フィラデルフィア合衆国百年祭万国博に水墨画を出品、受賞。

京　　都　　府

1・一　幸野楳嶺、師中島来章の承諾を得て塩川文麟の門に入る。　楳嶺遺墨

4・10〔5・28〕　府、米国サンフランシスコ博（6・15～7・17）への出品を管内に布告（北条太平ら6名、出品を願い出、また北条太平およびその手代　治兵衛・常七は横浜から渡航しようとしたが遅れて不成功に終わる）。　府史博覧会類 2

7・15〔8・30〕　画家　中島来章没（享年76、綾小路大宮西光縁寺に葬る）。　京都名家墳墓録

7・29〔9・13〕　画家　長沢芦鳳没（享年68、北野御前通下の森南日向院に葬る）。　平安名家墓所一覧

7・一　明山初太郎、彦根藩の湖東焼に従事していたが廃藩と共に廃窯となり、京都に帰り幹山伝七の工場に入る。　湖東焼の研究

8・一　府は全国に先だち小学課業表を制定（習字関係のものは第5等（初学年）五十韻（平仮名・片仮名）、第4等（2学年）受取諸券・苗字尽・山城郡名地名・京都町名、第3等（3学年）諸国郡名・商売往来・私用文、第2等（4学年）世話千字文・諸券状・諸職往来・復文、第1等（5学年）公用文・即題手柬（かん））。　府史

9・8　塩川文麟、「三保図」屏風を描く。　京都の明治文化財

10・10～11・11〔11・22～12・22〕　京都博覧会、西本願寺書院に開催（わが国最初の博覧会、入場者11,211人の多数にのぼり、沈滞気味の京都の街を活気づける。しかし内容的には古物展ないし骨董会の感じで、同博開催趣旨の一つである産業振興の点からは貧弱。展示品：内国製品〔武具・古銭・古書画・珍石・古陶器など〕166点、清国製品〔古銭・書画〕131点、欧州製品〔佩剣・拳銃・汽車の模型・洋灯など〕39点、合計336点）。　京都博覧会沿革誌

10・一　府、長崎広運館仏語教師レオン=デュリー（Léon Dury）を招く（雇用契約は明5から明8・1まで3年間）。契約書中には「語学ノ外、当府下ノ為ニナルベキ事ヲ京都府庁有司ヨリ相談ニ及ブ時ハ詳悉ニ答論シ其ノ事ヲ補助スベキ事」とある。　稲畑勝太郎君伝

11・14　陶工　4代和気亀亭没（大黒町通五条下ル称名寺に葬る）。　京都名家墳墓録、湖東焼の研究

12・21〔1・30〕　画家　原在照没（享年59、寺町三条北天性寺に葬る）。　京都美術協会雑誌 36、平安名家墓所一覧

この年

▷　初代幹山伝七、東京の古筆善太夫が拝命した宮内省の御用品を焼成。また銀座4丁目に支店を設置しその便宜をはかる。　湖東焼の研究

▷　3代入江道仙、この年から舎密局用の器械の陶器を制作。　陶磁器業者に関する取調書

▷　石田有年、「八坂祭礼の図」を銅版製作。　日本銅版画志

▷　輪違屋改造（安政4復興、和風）。　京都の明治文化財

▷　田村宗立、欧学舎支舎英学校（陰3・25、勧業場内に設立）に入学、米国人チャールス=ボールドウィンにつき英語および油絵を学ぶ。　府治沿革誌、京都洋画の黎明期

▷　東本願寺の入札行なわれる。　温知考

▷　閨秀画家　野口小蘋、上京し画業を事とする。　原色明治百年美術館

▷　富岡鉄斎、このころから大和絵を描き始める。　鉄斎

参　　考

（明3からつづく）

岡村	雪峰	字子求号楽眞堂	両替町押小路南
小野	包孝	字号	衣棚押小路北
国分	文友	字中二号雲裡	松原愛宕寺中
中川	江雲	字	新檜木町丸太町
村瀬宗太郎		号雙石	上京
天	美福	字	烏丸丸太町南
林	照高	号其山	黒門中立売南
馬淵	旭山	字無偏	鞍馬口室町
青	重威	字主信号	岡崎
川端	玉章	字子父号敬亭	四条東洞院西
小島	譜	字士和号	堺町六角南
高橋	正順	字至徳号静意	東洞院綾小路南
大角	有隣	字子行	洛東吉田
岸	竹堂	号子會	柳馬場押小路北
蒲生	順卿	号鳩峰	西六条
渡辺	丹涯		
西山	中書	字博養号谷雲	新門前縄手東
岡嶋	士願	字素竹号	冨小路姉小路北
熊谷	直彦	字篤雅号表魚袋	高倉三条角
前川	泡斎	字晃号士玉	堺町松原下
前川	文嶺	字	前人男父同居
竹川	友廣	字	
樋口	翠岳	字士信	東六条翠江男父同居

文人画

岡本	匡保	字号	上賀茂
黒田	一貞	号西塘	百万辺屋敷
釈	清亮（松泉院）	号玉嶺	双林寺大雅堂
砂川		出文雅部	
中林	成業	字紹文号竹溪	岡崎
桂	呉鳳	字号	両替町二条南
前田	碩	字実甫	木屋町松原北
日根	長（対山）	字成之号	聖護院村
名草	孝	字伯友号露香	衣棚御池北
山本	章	号	烏丸仏光寺南
釈	永常	号無能又月杠	一条葭屋町
釈	一鳳	字眠竜	百万辺
釈	眞亮（長春庵）	号	洛東双林寺
原	穀	字	御幸町二条南
大倉	周昶	字図南号啓斎	
高井	文溪	字士清	高辻柳馬場西
山口	華	字公鄂号	御幸町二条角
重	春塘	字	柳馬場二条北
上野	恭（雲岳）	字克譲	烏丸仏光寺南

（明5につづく）

日　　本

5・23〔7・10〕　太政官、古器旧物の尊重並びに保存を布告。

9・一　川上冬崖、『西画指南』前編訳出（文部省刊、後編明8・10）。

9・一　文部省内に博物局設置、湯島大成殿は博物局の観覧場となる。

12・9〔1・18〕　高橋由一、南校画学掛となる。

この年

▷　廃藩による旧大名所蔵の名画、安価で市中に氾濫（たとえば雪舟・周文等が1円50銭で芝区日影町の店頭に掛る）。また当代文人画流行。

▷　英人ディッキンズ（のちロンドンで北斎『富嶽百景』出版）、仏人デュレ（美術工芸品購入）ら来日。

▷　近藤正純、『泰西画式』発行。

▷　橋本雅邦、海軍兵学寮に出仕、図学を教える。

京　都　府

1・6〔2・14〕 篆刻家　中村水竹没（文化4京都生、享年66、東山霊山に葬る）。
書道全集 25、平安名家墓所一覧

1・15〔2・23〕 府、清水亀七（号亀山）・3代清水六兵衛・初代幹山伝七・錦光山宗兵衛・丹山青海・和田安兵衛・中川浄益・鳥原利右衛門等を「職業出精ノ者」として表彰（亀山は、童仙房開拓地において陶窯築造したこと、六兵衛は、昨夏以来洋製敷瓦焼を試み美麗に製造したこと、幹山・錦光山は、共に近来種々工夫を凝らし専ら外国向の陶器製造を行ない諸国へ輸出したこと、丹山は、昨秋外国風陶器を製造し府に献納その後引続き工夫を凝らし諸国へ輸出したこと、和田は、外国人向け絹織物に工夫を凝らしたこと、浄益は、近来専ら外国製品を模作し諸国へ金銅器を輸出したこと、鳥原は、織物に特に精密の模様を工夫し外国人の賞讃を受けたこと）。　京都新聞 16

1・一　舎密局分局2棟、鴨川西岸二条夷川間に新築竣工（同局で石鹸および氷糖の製造を始め、医薬用および絹絲精練用に使用を宣伝、また機械製絹工場も設置）。　明治文化と明石博高翁

3・10～5・30〔4・17～6・3〕 第1回京都博覧会、西本願寺対面所・書院・黒書院および建仁寺方丈・知恩院大方丈・小方丈に開催（出陳分類は西本願寺会場が草本玉石としての穀類・果物類・薬品・煙草・砂糖・植物類・水晶玉石類・鉱石・新書画類・手玩細工物・玻璃細工・扇子団扇・提灯・貝類・錦絵・人形・生蠟・油類。建仁寺会場は飲食物としての茶酒菓子類、新古器物としての銅器・銭貨・漆器・描金・陶器・薬品、細工物としての金銀細工・錫鉄細工・象牙細工・竹細工・亀甲細工・鉄葉細工・彫刻物・弓箭・馬具・諸器械類・鳥魚類。知恩院会場は呉服物類としての生糸・染糸・西陣織物・絹布類・麻・麻布類・綿類・綿布類、武具衣冠としての諸種衣服・甲冑・刀剣類、雑物としての紙類・皮革類・干魚類・寒天・海草類・化粧具・簪類。出品人832人、外人6人、出品数2,485点、また附博覧会〔余興〕として好事家の団体先春社は、知恩院山門上に売茶の雅莚を開催、その中に文人雅客の篆刻墨戯の莚を設ける。さらに都踊が祇園新地新橋松の尾の席を舞台に創始、以後毎年開催される）。
京都博覧会沿革誌

4・10〔5・16〕 京都博覧会社役員一同、博覧会閉会後の寂寥を憂い欧米諸国の常設博物館に範をとる常設博覧会の設置を府に請願（5月府はこの趣旨に賛同、会場を西本願寺書院としこれを仮博物館と称し、第1回京都博覧会閉会後、その収集品の一部をここに陳列することにする）。同上

4・10〔5・16〕 府、臨時博覧会事務局の依頼により伊達弥助・永嶋九郎兵衛・幹山伝七・丹山青海の4人を選んで東上を命ず（彼らは同事務局に西陣織物および清水焼・粟田焼の製造法・特質・形状等を詳しく説明、6・12 帰洛）。
府史博覧会類 2

6・21〔7・26〕 京都博覧会社、先きに仮博物館と称したものを常設博覧会として西本願寺書院に開催、以後毎月6回、陰暦1、6の日に 11・27〔12・27〕まで開催。　京都博覧会沿革誌

6・27〔8・1〕 府、西陣物産会社および清水粟田陶工らに臨時博覧会事務局指導による物品調達を命じる。　府史博覧会類 2

7・一　ゴットフリート=ワグネル、オーストリア　ウイーン万国博に美術工芸品を出品準備のため京都に出張。　ワグネル伝

9・8〔10・10〕 府、臨時博覧会事務局の依頼に応じウイーン博に出品する府下の物産の図説等を編集（この日完成分を事務局へ送付、その中には『五条坂粟田陶器詳説』1冊、五条坂陶器製図3枚、粟田陶器製図5枚などがある）。
府史博覧会類 2

9・一　丹山青海、府の依頼により『陶器弁解』（京焼の製法を図解したもの）を編集。
京焼百年の歩み

9・一　原在泉、宮内省の御用を命じられ東上。
書画骨董雑誌 大2・7

10・18〔11・18〕 臨時博覧会事務局佐野常民、同局に送られた事務局注文の見本検査の結果、幹山伝七の陶器色絵の不合格を府に通知（同書面で、東京の画工が絵付けをするから白焼のまま送付するよう述べている。府は一度これを拒否したが、再度の要請で同意）。　府史博覧会類 2

10・一　山中信天翁、北白川家令兼務となる。
書道全集 25

11・16〔12・16〕 府、西陣織工中から、佐倉常七・井上伊兵衛・吉田忠七を選抜し洋式織機伝習の目的で仏国に派遣、この日神戸港出帆（官費留学、海路55日を経てマルセイユに到着、明6・1・13目的地リョンに到着）。
西陣織物館記、京都新聞 73、府史勧業類

11・28〔12・28〕 府、臨時博覧会事務局に府出品および同事務局注文の出品表を送付。
府史博覧会類 2

この年

▷　のちの3代清風与平、慶応2清風家の養子になって以来陶磁研究に没頭してきたが、別に一家を創立して清山と号す。
京都美術協会雑誌 17、陶磁器業者に関する取調書

参　考

（明4からつづく）

森　精一郎　字号香邨　大宮七条北
中西　耕石　壽　号竹叟　清水三丁目
中西　耕巖　前人男　木屋町三条北
中西　松石　号　醒井魚棚南
大亦　瑟子　字湘仙号繡蝶
紅　蘭　再出

奇　工

天文地理兼銅板
松本　保居　号玄々堂　洛東霊山枡屋町
森田利兵衛　号　四条室町東
田中儀右エ門　号　四条東洞院西

地理家相方鑒
甲賀　褒久　字庸得号一教斎　堺町二条北

良　工

彫刀
三品　金行　号　丸太町川端東
尾崎　正隆　号天竜子　新烏丸夷川上ル

細彫
尾崎　繁壽　号一貫舟　前人男

鍛刀
角　秀國　号　岡崎

神鏡
青　盛冨　号天正丸御鏡師　寺町夷川南

金彫
皆山　光久　号　二条小川
沢　光則　号　車屋町竹屋町北
竹内　千尋　号竹舟　御池小川西
楽吉左衛門　号　上京

陶工
高橋　道八　号花中亭　五条坂
西村　永楽　号　油小路一条南
宮川　蝶喜　号　高台寺北門前
和気　亀亭　号　五条坂
古藤　清七　号　五条坂
加藤　幹山　号松雲亭　清水三年坂下
古藤　清六　号　五条坂
宮川　香斎　号　五条坂
真清水蔵六　号　五条坂
陶工与兵衛　号清風舎　五条坂
宮田　亀壽　号不老軒　五条坂
桜木　旭亭　号東光山　五条坂
陶工　文平　号鳳嶽軒　五条坂
陶工　寶山　号　粟田白川橋東
尾形　周平　号　五条坂

大田垣蓮月尼　西賀茂
三輪貞信尼　蓬生園　聖護院村

（明5につづく）

日　本

1・一　オーストリアのウイーン万国博に賛同出品することになり官令発布（同部門26の名称中、はじめて「美術」の文字を使用公示。ただしFine Arts の訳である。出品はすべて官費をもって買入れ全国の有名物産を網羅）。

3・10～3・29〔4・17～5・6〕 湯島聖堂に博覧会を開催（博物館主催）。古美術および油絵などを展覧、高橋由一は「ヒマラヤ山の図」など出品。

5・15〔6・20〕 蜷川式胤・岸光景ら、文部省博物局より社寺宝物取調を命ぜられ、伊勢・大和・山城の諸社寺を歴訪調査。

5・一　オーストリア　ウイーン大博覧会事務局副総裁佐野常民、陶画改良を目的として付属の陶磁器製造所（ただし陶画工場のみ）を浅草芝崎町日輪寺内に設置（旧来の陶磁器模様を美術的絵画に進めて輸出振興を計ることが主眼、陶画工42人、なお河原徳立も同局御用掛として活躍、同所は翌6・7ごろ閉局）。

この年

▷　教育令の発布（仏国の教育令を範とし、小学校と中学校においても図画と罫線学（用器画）を課す。教科書として川上冬崖の『西画指南』、山岡正章の『小学画学書』、宮本三平の『小学普通画学本』を文部省から出版、教科書もすべて鉛筆画法によるものが用いられた）。

▷　藤野海南の主唱によって舊雨社創立（同人には重野成斎・岡鹿門・阪谷朗廬・小野湖山らがあり、毎月1回上野不忍池畔の長酡亭に集まって雅会を開く。伏見宮家から醍醐天皇宸筆の詩巻を皇室に献上）。

京　都　府

▷　田中利七、手織広幅機械を作り、琥珀・繻子織を製出、これに刺繍を施してテーブル掛・寝台掛などとする。　京都美術協会雑誌 56

▷　府参事槙村正直、京都博覧会社および長谷知事に意見書を提出し、「芸術に眸を凝らし産業に心を労したるものの欝滞の気を敬せしむる策なからんや」と博覧会に伴うお祭騒ぎの余興（当時附博覧会という）の必要を強調。
京都博覧会沿革誌

▷　幸野梅嶺、雅号を「楳嶺」に改める。
楳嶺遺墨

▷　四方春翠、『万国往来』に掲載中の「地球を平面にみる略図」を銅版製作（石田旭山助刀）。
日本銅版画志

▷　12代永楽和全、三河国岡崎へ行き新窯を築く。　陶磁器業者に関する取調書

この年ごろ

▷　田村宗立、粟田口療病院（仮開業式 11・1 挙行）に勤務（明9ころまでか。雇医教師ドイツ人 Junker（ヨンケル） von（フオン） Langegg（ランゲッグ） の指導のもとに解剖図や教材用掛図などを描く）。
府立医科大学80年史、京都洋画の黎明期

▷　田村宗立、洋画研究のため、横浜へ行く（チャールス=ワーグマンにつき洋画法を学ぶ）。
京都洋画の黎明期、日出 大6・3・6

▷　府下の諸商売

陶器類	590戸
新古書画	5
具師	6
表具	218
蒔絵師	95
絵師	77
書画鑑定	3

注　明5・3　京都府が在坂租税寮に府下諸商売職業を報告したものから抜すい

参　考　　日　本

（明5からつづく）

細奇工

上嶋　景利　号　　新町御池角

竹根印現創意

小嶋　彫嶺　再出

細密画米位書

別所　義和　字之敬号柘楓園　　松原広道西南入

小西　方利　字士敬号青峰　　知恩院小堀袋町

銅鐫

松田　緑山　号玄々堂又清泉堂　　松原広道東

松岡　範明　字子厚号神阜　　吉田

平安人物志（慶応3年改刻版）

京　　都　　府

1・16　常設博覧会、西本願寺書院に開催（本年初日、以後11・21まで1、6の日に開場、博覧会開催中は除く）。　京都博覧会沿革誌

1・30　ウイーン万国博への政府参加派遣使として京都から伊達弥助（機織）・その手代早川忠七・丹山陸郎（陶磁器）が選抜され、この日横浜港出帆（伊達弥助は自家製の梨子織などを持参。3人はウイーン博終了後、伝習生として各専門の欧州近代技術の実地研究を行なう）。　西陣史、西陣織物館記

2・13　初代秦蔵六、天皇の御璽・国璽の黄金印の鋳造を宮内省から命ぜられる（祝之助を伴い上京、鶏冠鈕で鳳凰を刻す）。　秦蔵六

2・一　並河靖之、支那製鬼国窯の器物を試作（並河は明4までは伏見宮家家従の身分であったが、同年以降社会状勢の変遷に際し実業に従事することを決意。それまで種々の商工業に従事したが失敗）。　京都美術協会雑誌 13

3・16～6・10　第2回京都博覧会、京都御所旧内侍所・御花御殿・対之屋御馬場・仙洞御所に開催（出品総数2,563点、出陳分類第1場：御物ならびに珍宝に属する物・冠服・楽器・書籍等文具・刀剣等武器、第2場：織物・衣服・絲類・生魚・骨角甲牙竹木紙細工物、第3場：玉石鉱物・陶銅漆器・穀薬菓菜・諸器械・飲食物・書画・日用百般之具、第4場：植物会・調馬、第5場：禽獣会、このほか、土御門入口に陶工が轆轤を据え模型を置き、土砂釉薬を使用実演、窯を築いて各種の製品を即売。出席者は〔五条坂〕高橋道八・真清水蔵六・清水七兵衛・和気亀亭・清風与平・清水六兵衛、〔清水〕幹山伝七、〔粟田〕丹山青海・錦光山宗兵衛・帯山与兵衛、〔上京〕永楽善五郎。また花御殿跡西で西陣有数の機業家が手織械を据えつけ錦襴織立を実演。西陣物産会社は高機〔空引〕を設けて実演（これは第3、4、5回博覧会でも行なわれる）。さらに同所で書画之会を開催、これは在京書画家の席上揮毫で、絹紙の他に、陶工の作った素焼にも入場者の求めに応じ筆をとる。出席者：土佐光文、鶴沢探真ら）。　京都博覧会沿革誌

6・4　石田旭山、「舞楽図」を銅版製作。　日本銅版画志

6・6　府、工部省と共に西陣物産会社の各種織機具を仏国に注文（明7・2船来）。　府史勧業類

6・12～14　京都博覧会開催中の3日間、花御殿ではじめて品評会を開催（批評のみで授賞はなし。対象は陶器・生糸・織物・銅器・絵画など、品評方は米人トルレムルヘー、仏人チュリーら。また博覧会品評録2巻が編纂される。その中の『陶器品評録』には次のような記述がある。「『清水粟田諸器之論』米人トルレムルヘー氏曰諸作皆精工ニシテ金画亡亦美ナリ、但其形状ト模様トニヨツテハ好マシカラザル者多シ、若シ欧米人ノ用ニ供セントナラバ須ク初ニ西洋所用ノ形状及所喜ノ模様ヲ詳ニシテ製出ス可シ否ラサレバ其品イカホド一等タリトモ海外ヘ輸出スルニ恐ラクハ労シテ功ナキ患アルヘシ……」）。　京都博覧会沿革誌

8・一　舎密局本局、鴨川沿い土手町間元京極別邸跡に新築竣工（これにより仮局は移転、規模を拡大して広く研究生を募集。ラムネ・陶磁器・七宝・硝子・銀朱石版術・写真術などの実験室や製造場を増設し実地研究が行なわれる）。　明治文化と明石博高翁

9・一　谷如意、官を辞して弘道会を創立。　書道全集

9・一　機業家　井上利兵衛没（享年77）。　京都美術協会雑誌 143

10・3　金工　8代金谷五郎三郎没（享年64）。　日本鋳工史

12・28　佐倉常七・井上伊兵衛、リヨンでの伝習を終え帰国（2人は近代織機技術を習得するとともにジャガード・バッタン・金筬・紋彫器などを持ち帰る。とくに後年紋織物に画期的発達をもたらしたジャガード機はこの時はじめて輸入された）。　西陣織物館記

12・一　並河靖之は曽我義三郎に七宝焼製作を勧められ、製作方法をならい支那風の七宝を製造（最初は共同でやったが、1年でわかれ並河だけつづける）。　府著名物産調、京都美術協会雑誌 52

この年

▷　彦根・京都・大和・紀州に移り住んでいた陶工小川亀次郎は京都に帰り創業（文斎と号しもっぱら磁器を焼く）。　湖東焼の研究、京都工芸大観

▷　初代伊東陶山、宇治朝日山の麓で、松林長兵衛らと共に朝日焼の復興を計る。　初代陶山小伝

▷　幹山伝七、宮内省から延遼館備付の洋食器75種の製作を命ぜられ、特に大形の器を焼成するため京窯のほかに丸窯を東山産寧坂興正寺の北隣に築造（丸窯製造にあたっては知事や有力者の援助を得、また尾張の寺尾市四郎が指導）。　湖東焼の研究

▷　3代清風与平・龍文堂4代安之助、府勧業場御用掛に命ぜられる。　京都工芸大観、日本鋳工史

▷　山中信天翁、官を辞して京都に帰る。　書道全集 25

▷　森寛斎筆、「京都新名所四季」。　吉川コレクション落款

▷　主な作品：京都篠田家蔵「百老図」鈴木百年。　落款

▷　千総（ちそう）（西村総左衛門）、この年以後、毎年の代表的見本裂を大切に保存。　museum 69

↗

参　　考

(1)オーストリア　ウイーン万国博

1　京都府の出品

西陣織物　西陣物産惣会社、緒絹本紅染　第一紅商社、縮緬鹿子絞　第一鹿子絞商社、塩瀬織友禅染繻入帛紗　大田平助（友仙師）、清水焼陶器　加藤伝七（清水）・高橋道八（五条坂）、永楽焼　永楽善五郎（五条坂）、粟田焼　帯山与兵衛（五条坂）・丹山陸郎（五条坂）、楽焼　楽吉左衛門（五条坂）、七宝焼　七宝焼会社、漆器　第一漆器商社、一閑張器　飛来一閑（細工人）、銅器　中川浄益・金谷五郎三郎・龍文堂安之助・銅鉄商社、鉄葉細工　村上虎次郎、彫刻物　七條康教、彫刻物塑子・袋物部　今井利兵衛、人形　清水次兵衛・吉坂藤兵衛、毛植細工　並河清右衛門（毛様物師）、押絵　松田源三、扇類　御影堂・扇商社、団扇　団扇商社。

2　事務局の出品

・綾織一白地　桜摸様1反　紗織社（製元・竹内竹兵衛、織手・嶋原豊次郎）

・綾織一白地　桜摸様　稲妻入1反（製元同上）

・綟子織一水浅黄黒縞入1反　綟子社（製元・杉村嘉七、織手・嶋原豊次郎）、同、白茶黒縞入1反、同、羽二重織1反　羽二重衣（製元・吉田もと、織手・井上儀助）、同、白茶繻子1反　繻子社（製元・小川治郎兵衛、織手・弟子弥七）

・絽金織一白地厚板牡丹模様2反　模様社（製元・小川治郎兵衛、織手・弟子弥七）

・絽金織一白地厚板小宝盡模様1反　模様社（製元・織田七兵衛、織手・弟子萬吉）、白茶繻子　1反（製元・小川治郎兵衛、弟子弥七）　府史博覧会類 2

3　受賞者（優賞）

銅鉄金銀細工　村上虎次郎、絹織物　伊達弥助、金糸　金糸屋平兵衛、銅器　金谷五郎三郎、西京絹羽二重社、琥珀織　中村吉兵衛、銅金銀細工　平田彦四郎、金物細工　中川浄益、小間物　龍文堂安之助、織出絹　模様社、綾織絹　紗織社、紐笹縁　綴社、笹糸　友染社、銅金銀細工　黄銅製造社中、陶磁器　粟田五条坂陶工　　墺国博覧会参同紀要

↗　**この年ごろ**

▷　西村総左衛門、友禅の図様を一新しようと思い岸竹堂について絵を学ぶ（このころ画家は生活に困窮し、望月玉泉や今尾景年らも友禅の下絵を描くようになる）。　近代友禅史

▷　友禅、差友禅（手描き友禅）の時代。　近代友禅史

日　　本

2・25　ウイーン万国博の副総裁佐野常民、ワグネルや諸伝習生職工を伴って横浜を出帆。ワグネル、日本のために活躍。

5・1～11・2　ウイーン万国博覧会開催[1]、わが国出品の美術工芸品好評（わが国の文化を刺激し、産業貿易を促進し、あわせてわが国を海外に宣伝紹介する功績がある）。

6・一　高橋由一、日本橋浜町に洋画塾「天絵桜」を設立、この門から山田成章・安藤仲太郎・原田直次郎・荒木寛畝・川端玉章らが出る（明8天絵舎、同12天絵学舎と改称、同17閉鎖）。

8・下　河原徳立、兄弟ら3人と、陶磁器製造工場を、東京深川東森下町に設立、瓢池園と称す。

9・一　政府は各地の神社、仏閣ないし民間に伝存する古文書・古記録類の調査をはじめる。

10・13　画家　山本琴谷没（文化8生、享年63）。

この年

▷　新感覚語「図案」流行（明治政府がはじめてウイーン万国博を視察し、また米国に学び、帰国後 Design を「図案」と訳したのに始まる）。

▷　横山松三郎、上野不忍池畔に洋画塾を開く。

▷　東京品川で興業社、ガラス製造を始める（明9官営に移し、品川硝子製作所と改称）。

▷　初代諏訪蘇山、はじめて陶画を採雲棲旭山に学ぶ。

▷　阪正臣・前田黙鳳が上京、阪は平田銕胤・権田直助の門に入り国学を修め、前田は中村敬宇・小野湖山・岡本黄石らと交わる。

京　　都　　府

1・16　常設博覧会、西本願寺書院に開催（本年の初日、以後8・16まで1、6の日に開場（同会はこの年で廃止）。　京都博覧会沿革誌

3・1～6・8　第3回京都博覧会、京都御所および大宮御所に開催（出品総数2,602点、出陳分類：1区　内外国新古陶器、2区　御物、3区漆器、4区　漆器彫刻、5区　有職衣冠刀剣武器、6区　武器楽器、7区　新製漆器、8区　品評所、9区　文房飾、10区　竹木彫刻、11区　人勝（婦人髪飾のこと）、12区　毛植細工、13区　舎密所出品写真、14区　書画硯墨、15区　珠玉介石、16区　絞羅錦繡、17区　支那織物、18区　盆栽、19区・20区　生糸・縮緬絹布・真綿、21区・22区　西陣織物、23区　山梨・筑摩両県出品、24区　扇子商社、25区　盆栽、26区～29区　舎密所出品・病院出張所、30区　砥石、31区　読売品、32区　ヨンケル氏出品、33区　西洋雑貨、34区　匠工具、35区～42区　女紅場製品、43区　貨幣・銀器、44区物産茶製社、45区・46区　古銅器、47区～49区古鉄品、また佐倉常七・井上伊兵衛のもち帰った仏製洋織機が出品され、蒸気力により実際に運転される。補助博覧として御馬見所にて書画揮毫、百花園にて陶器製造の実演がある）。　京都博覧会沿革誌

3・20　吉田忠七、仏国から帰国の途中下田沖で乗船ニール号の沈没にあい死亡（彼はとくに帰国延期を請願し、研究を重ねて新技術を習得、新機械をたずさえていた）。　西陣織物館記

4・一　京都市内で詩文書画あい変わらず盛ん。　京都新聞 70

5・一　府、舎密局附属として河原町二条下ル一ノ舟入町、旧角倉屋敷跡に織工場を設置（この月佐倉常七・井上伊兵衛が府の依頼で購入した機械類の据付けを終わる。6月、織工場始業、両人は洋式機械と西陣在来の機械とを併用し模範品の製織に努める。明11・3増築、同12・4織殿と改称、同14民間に移管、同16官営に復す）。　西陣織物館記、西陣史

6・4　京都文庫内に封蔵の厳儀御器物を随時開館して、府開設の博覧会場に陳列を許す。　近代博物館施設発達資料

6・9　京都博覧会、前年の例にならい花御殿で新古漆器・新古銅器・飲食薬石および舎密物の品評会を開催（10日は陶器・諸器械・諸国物産・書画、11日は綿布・生絲・扇子其他細工物・女紅場製品の品評会を開催）。　京都博覧会沿革誌

7・29　高島屋初代飯田新七没（享和3生、享年71）。　高島屋100年史

12・1　府、オーストリア博から帰国の正院御用掛染色工中村喜一郎を招く。　府史勧業類

この年

▷　安部井櫟堂、東京におもむき、大日本国璽、天皇御璽の金印を刻し金帛を賜わる。　書道全集 25

▷　3代高橋道八、家業を長男光頼に譲りもっぱら桃山焼に従事。　京都工芸大観

▷　染料商桂屋の支店（烏丸通押小路下ル東）、ドイツ染料を輸入販売（最初に入った種類はトウヒ（臭紅）・サフラニン（赤）・塩基性バイオレット（光紅）・龍虎印コンコ）。　近代友禅史

▷　永井喜七、西陣繻子を改良、安価で実用向きの新繻子を案出（明治維新以降南京繻子の輸入に西陣繻子は大いに圧迫され、従来の純絹にかわる綿糸を緯に応用、また艶出ロールを用いる。明11には洋式織法を用い、同13～14ころから声価高まる）。　西陣史

▷　紀伊島新助ら、七宝を企業化し初めて輸出。　府著名物産調

▷　九谷陶工　2代横萩一光、金沢の鶯谷から京都に来住（明14門人中川浅次郎を伴い金沢に帰り、久田窯を再興）。　定本九谷

▷　西村総左衛門、宮内省から屏風製作を拝命、南蘋の花鳥12幅対を岸竹堂・今尾景年・望月玉泉らの模写による友仙と刺繍で製織。　名家歴訪録

▷　塩川文麟、「螢」を描く。　落款

参　　考　　日　　本

2・18　内務省に勧業寮をおく（職制改定）。

4・31　五姓田芳柳は新門辰五郎と相談し、浅草奥山で「西洋油画日本人並びに絹地画当世役者似顔其外古代之人物」を陳列して、いわゆる油絵興行を行なう。

5・一　湯島聖堂に書画展覧会開催（博覧会事務局主催、川上冬崖「蓮翡翠図」、滝和亭「岩蘭之図」、松本楓湖「牛若丸五条橋図」、柴田是真「瀑布の図」、奥原晴湖「山水」のほか柳圃・鮮斎・高橋由一らの作品を展示）。

6・一　梅村翠山、米国から石版彫刻師オットマン=スモリック・印刷師ポラードを招き、彫刻会社を創立、石版印刷をはじめる。

10・8　松田緑山、紙幣寮と永久に訣別。

10・一　工学寮が和紙に関する文献の収集に着手。

11・一　森春濤、下谷に移居し茉莉吟社を創立。

11・24　画家　佐竹永海没（享和3生、享年72）。

この年

▷春　一円吟社が結成され毎月21日上野不忍池畔の長酡亭で例会を開く。

▷　巻菱湖集字、村田海石加筆の『四体千字文』（大阪、柳原嘉兵衛刊）、またこのころから日下部鳴鶴・巌谷一六らが安田老山の水石荘に出入りし、画を学ぶ。

▷　兵学寮が廃止となる。

▷　洋画家　初代五姓田芳柳、明治天皇の肖像画を製作。

▷　国沢新九郎、英国留学から帰国（欧州に留学し正式に西洋画を学んだ最初の人物）。

▷　陸軍省、陸軍文庫から図画手本『写景法範』を出版（石版印刷による最初の出版図書）。

▷　狩野友信・山岡正章、『図版楷梯』を刊行。

▷　茶商松尾儀助、古道具商若井兼三郎ら、京橋に起立工商会社を設立、工芸美術品の製作輸出を行なう（たとえば陶磁器の素地は瀬戸に注文し、それを服部杏圃・曽我徳丸ら20人以上の専属絵付師に絵模様を描かせた、明24解散）。

この年ごろ

▷　窯業地瀬戸の染付材料、中国輸入の呉須に代わって新しくドイツ製の酸化コバルトを使用。

京　　都　　府

1・一　伊達弥助・早川忠七、仏国から帰国。
明治染織経済史

1・一　府、織工場における洋式織機運転良好の結果、その技術を全国に普及し、織布の機械化をはかるため全国各地に伝習生を募集（これにより全国の各織物生産地の洋式機械化が促進された）。
西陣織物館記

2・一　府、博物館の意義について告諭し、同時に「博物館事物類集票」を制定。　布達号外

3・1～6・8　第4回京都博覧会、京都御所および大宮御所に開催（出品総数84,545点、補助博覧として西洋影戯（幻燈会のこと）を開催。なおこの年博覧会社は博覧会規則ならびに出品規則を全国に頒布し大いに出品をすすめ、その結果厳島神社の平家奉納経巻・名古屋城の金鯱など国宝級の重宝珍什が展覧される。知事長谷信篤は美術工芸の参考資料とするため、市内有数の画工・筆工にこれらを写生させる、これはのち2帖に製し保存される）。
京都博覧会沿革誌

3・2　画家　円山応立没（文化14生、享年59、四条大宮西悟真寺に葬る）。
京都名家墳墓録、平安名家墓所一覧

3・19　府、幹山伝七・丹山青海・金谷五郎三郎らを勧業場御用掛に命じる。府庁文書 明8-26

4・一　京都御所旧米倉を借りて博物館を開館、京都府営（明16閉館）。　近代博物館施設発達資料

5・9　府、第4回京都博覧会の品評方を任命。(1)　府庁文書 明8-26、京都博覧会沿革誌、京都博覧協会史略

5・12　長谷知事、勅封の保存について建議。
近代博物館施設発達資料

5・一　府、「京都博覧会賞牌授与目途」を制定〔これは授賞審査の標準をはじめて定めた手続書で、天造物と人造物に2分し人造物については「(甲)学術ニ関渉シテ事物ヲ発明工造シ民生利用ヲ為スモノハ上賞上等、欧米等ノ事物ヲ模製シ文化ヲ裨補スルモノ其ノ特別ナルハ上賞下等、之ニ次グモノハ次賞、(乙)学術ニ関渉セズ従来実験ニ基キ新規工造シ大ニ民生利用ヲナスモノハ上賞上等、之ニ次グハ下等、(丙)工造ノ事物民生不可欠者ニアラズト雖モ精工ニシテ人智ノ進歩ニ裨益アルモノハ上賞下等、(丁)工造ノ事物ヲ発明製作シ暫ク民生利用ニ充ト雖モ粗朴ニシテ未ダ其精粋ヲ窮メザルハ次賞、(戊)欧米等ノ事物ヲ模製シ文化ヲ裨補スルモノ其精ナルハ上賞下等、粗ナルハ次賞、(己)従来一地方ノ名産ニシテ民生利用ヲ為ス事物ヲ造成スルモノ其特別ナルモノハ上賞上等、之ニ次グモノハ下等、民生利用欠クベカラザル者ニアラズト雖モ精巧ニシテ人智ノ進歩ヲ裨補スル少ナカラズ為ニ其他ノ繁昌ヲ為スモノハ其創業ノ系統ハ上賞下等、創業ノ系統無ク其人民一般工成スモノハ其品ノ優劣ヲ以テ賞ス、(庚)学芸ヲ推闡ノ国家富強ヲ図ル事業ニ基ズクモノ其特別ナルハ上賞上等、之ニ次グハ下等或ハ次賞」とし、これに基づき、物品別に日を定めて審査討議が行なわれる。5・14 紡織類、5・19 陶瓷類(新古陶器・瓷器・玻璃・琺瑯類・宝石・鬼国窰)、5・22 漆製（生漆・漆器・堆朱・螺鈿・描金・一閑張・仮漆等)、彫刻物（玉石・角・木彫刻)、5・25 金鎮類（新古銅鎮器・貨幣・鋳物・金銀細工)、色染（絵具・染草)、書画（新古書画・撮影・油画・銅版・石版画等）の記録がある〕。　京都博覧会沿革誌

6・2　金工（釜）11代大西浄寿没（文化5生、享年68、名初め三右衛門、のち清右衛門)。
日本鋳工史

7・4　画家　土佐光章没（享年28、知恩寺に葬る)。
平安名家墓所一覧

8・23　篆刻家　岡田覃思堂没（享年62、東山黒谷に葬る)。
平安名家墓所一覧

9・7　陶工　明山初太郎没（要法寺顕寿院に葬る)。
湖東焼の研究

9・一　4代高橋道八、府から東京土瓦試験所に出張を命ぜられ西洋陶磁器製造法を研究（この間約7カ月、以後和漢洋の陶式を折衷し文房床飾、酒器の形および色を改良、またはじめて石膏を型に応用する方法を同業者に教示)。　京都工芸大観

11・15　第4回京都博覧会褒賞授与式、河原町勧業場に挙行（わが国最初の褒賞授与)。(2)
京都博覧会沿革誌

11・一　府、舎密局附属として染殿を本局の南方、夷川下ルの実験場内に設置（中村喜一郎がアニリン染法ほかヨーロッパの洋式染色術を教授したが、最初はわが国固有の染色法をよく知らず実地に応用するのに失敗、約1カ年してはじめて成功。明15廃止)。　稲畑勝太郎君伝

12・10　能書家・歌人　太田垣蓮月尼没（寛政3生、享年85、西加茂小谷墓地に葬る)。
京都名家墳墓録

この年

▷　今尾景年、花鳥画譜の著作に着手（明18完成)。
景年画歴

▷　伊達弥助、東京山王門勧業試験場でオーストリア式ジャガード機による織技の実演に従事。
京都美術協会雑誌 143

▷　2代松風嘉定、輸出用磁器製造を開始。
京都の新興工業

↗

参　　考

第4回京都博覧会

(1)品評方

本草（薬草のこと）山本章夫・田中宣之、友禅織物 市田理八・西村治兵衛、縮緬 三越喜右衛門、呉服 下村忠右衛門、古裂巾 土田友湖、外療道具 佐々木治兵衛、陶磁器 高橋道八・真清水蔵六・丹山青海・幹山伝七、骨董 国松栄吉・大橋四五六・熊谷久兵衛、刀剣 能勢角右衛門、描金 木村表助・浅野宗七、漆器 西村宗三郎、銅器 秦蔵六、画 塩川文麟、鋳物 金谷五郎三郎、彫鐫（打物のこと）岩田半平、ほかに品評補助として84人を併わせ任命。

(2)受賞者

金牌3人、有功金牌 煎茶銘寿 入江宗助、雅致金牌 銅器 秦蔵六、蒸気器械〔英人〕イ=シ=キルビー

銀牌83人、進歩銀牌　3代清風与平・4代高橋道八・帯山与兵衛ら24、有功31、妙技3、補助22

銅牌159人、進歩銅賞牌　紹美栄祐、有功銅賞牌　並河靖之、その他6代和気亀亭（染付水注)・田中利七・3代入江道仙・田村宗立（水彩画)・錦光山宗兵衛・清水六兵衛・真清水蔵六

褒状　今尾景年・伊沢九皐・西村宗三郎
京都博覧会沿革誌、府庁文書 明8-26

↗　▷　平野吉兵衛、外人向けに簡単な新鋳造法による銅鉄器を製造（これを独人ベンケーイに示す、これらは庸器と称し外人のみに販売)。
京都美術協会雑誌 122

▷　小野家・鷹司家の入札行なわれる。
温知考

▷　塩川文麟、「雨後山水図」（京都博物館蔵)。
落款

▷　陶磁器に西洋絵具が用いはじめられる。
府著名物産調

▷　女紅場の建築教師英人アーネスト=ウエットン、京都博覧会に油絵3点を出品。
朝日 昭16・9・15

日　　本

1・12　伊人画家・銅版画家エドアルド=キョソーネ、大蔵省紙幣寮の招きにより来日（明24まで在職、紙幣・郵便切手などの印刷を改良)。

2・一　ワグネル、博物館および画学校の創設を建議。

3・30　博覧会事務局を博物館と改称し、内務省の所管とする（明15・3 上野公園に移り、農商務省所管となる。国立博物館の源)。

5・一　五姓田義松（明7 東京に移る)、向島に洋画塾を開く。

9・3　本木昌造没（文政7生、わが国鉛活字印刷の創始者)。

10・6　国沢新九郎、新橋竹川町に最初の洋画展を開く。中でも高橋由一の「乾魚の図」が注目される。

この年

▷春　奈良博覧会で正倉院宝物が一般公開され、楽毅論、その他聖武・孝謙天皇の勅書、宸翰などの写真撮影が行なわれる。

▷　高橋由一、画塾天絵楼を天絵舎と改称し、毎月第1日曜に展覧会を開催、自作および門下生の作品を展覧。

▷　国沢新九郎、東京麹町平河町に画塾彰技堂を創設（国沢に学んだ主な作家は、本多錦吉郎・浅井忠・西敬・練山練吉・藤田正忠・田崎廷次郎・宇住勇魚など)。

▷　川上冬崖、『西画指南』後編3冊を文部省から刊行（蘭人某著の翻訳)。

▷　有田香蘭社創立。

京　　都　　府

１・一　並河靖之、七宝標本を横浜ストロン商会に提示し、５年間の特約を結ぶ(明10・３同商会は恐慌を理由に契約を破棄)。
京都美術協会雑誌 52

２・10　府、博物館で庶物鑑定を行なう旨達す（３・２から、鑑定規則制定は１日）。　府達55号

２・29　博物館、京都博物館と改称。府達93号

２・一　織工　４代伊達弥助没（享年64、号周斎)。
伊達周斎翁伝

３・３　京都博物館を設置。
近代博物館施設発達資料

３・15～６・22　第５回京都博覧会[1]、第１会場京都御所、第２会場仙洞旧院および大宮御所に開催（出品総数、非売品・8,324点、売品140,919点。第１会場を５大区分し、区毎に各小区を設ける。第１大区　金銀玉石・文武の器具・古製の陶器・漆器等諸家の蔵品、第２大区　審査品評を希望するものをはじめ、市郡各区ならびに諸府県出品、第３大区　御物および博物館蔵品、第４大区　諸商社の売品・女紅場の製品・第５大区　西陣機織の実演・布帛の類ならびに諸商社の出品。第２会場は動植物をはじめ農産物。なおこの年も補助博覧として日を定めて書画揮毫を開催)。
京都博覧会沿革誌

５・８　仏画家　高橋一斎没（享年74、洛東永観堂に葬る)。
平安名家墓所一覧

６・11　第５回京都博覧会、はじめて審査書読会を開催（出品品目をわかち日を定めて出品人を一場に集め、すでに終わった審査の概要を説明し精巧を挙げ粗拙を論し今後の改善の方法を教える。この日は陶磁器・銅器・金銀器・衡量器について、彫刻物は12日、紡織・色染類は13日、絵画・漆器は15日)。
京都博覧会沿革誌

10・16　画家　前川五嶺没（享年72、東山智恩院に葬る)。
平安名家墓所一覧

10・17　金工　後藤一乗没（寛政３生、享年86、名光貨・光行・八郎兵衛、号伯応・凸凹、紫竹常徳寺に葬る)。　京都名家墳墓録、京都美術協会雑誌

12・一　富岡鉄斎、和泉国大島郡大島村の大島神社大宮司に任ぜられる（明10・１　赴任、明14辞任し京都に帰る)。
鉄斎

この年

▷　春、福井から織工場伝習生として在洛中の村野文治助、寄宿の差物大工　荒木小平に対し日本でジャガード機の模製の必要を説く。
西陣織物館記

▷　奥村松山、幹山工場勤務を辞し、独立して五条坂に製陶を開始（古伊万里・仁清・幹山風の陶器を製作)。
湖東焼の研究、陶磁器業者に関する取調書

▷　金工　橋本一至、宮内省の命により天皇の佩剣を装飾彫刻。
京都美術協会雑誌 119

▷　平野吉兵衛、輸出品用の象眼銅器を製造、寺町に開店（これは主に工人にまかせ、自らは漢・魏・唐・宋の作品を研究、その模倣により鼎・鹵・鏡・盤を製作、また仏像も作る)。
京都美術協会雑誌 122

▷　西村総左衛門、外国向けに種々の試作を行なう〔繻子地に釆絲をもって花卉鳥獣や嵐峡の真景（下絵は専ら岸竹堂）を刺繍、２曲ないし４曲屏風を製作〕。
京都美術協会雑誌 124

▷　山本利兵衛、讃岐金刀比羅神社造営にあたり、門人富田幸七と共に本宮の天井・壁に桜花図蒔絵を製作。
京都美術協会雑誌 126

▷　博物館を府立勧業場内（河原町二条下ル）に移す。
京都国立博物館70年史

▷　幸野楳嶺、東京から銚子へと遊歴『東京写真』なる。
楳嶺遺墨

▷　米国フィラデルフィア博覧会へ塩川文麟「音羽山畑雨図」「花鳥山晴雪の図」、鈴木百年「群禽の図」出品。
米国博覧会報告書

▷　近衛家の入札行なわれる。
温知考

▷　岸竹堂,「大津唐崎図」屏風を描く。
京都の明治文化財

参　　考

(1)第５回京都博覧会

１　審査官

飯田孝次・河原忠次郎・明石博高・中山精一・野辺地尚義・田代俊二・伊藤惇・伊良子光信・柴田是真・広野孫三郎

２　品評方

〔甲の部〕山本章夫・田中宣之・熊谷弥右衛門・熊谷久兵衛・佐々木治兵衛・市田理八・国松栄吉・真清水蔵六・大橋四五六・丹山青海・秦蔵六・塩川文麟・岩田半平・百川儀助・福田庄兵衛・西村治兵衛

〔乙の部〕岸田藤七・長尾小兵衛・大島善兵衛・矢代庄兵衛・三上復一・中西昌作・喜多川平八・中孫三郎・清水六兵衛・松村良助・八木伝兵衛・高橋道八・幹山伝七・熊勢角右衛門・木村表助・浅野友七

〔丙の部〕金谷五郎三郎・三越喜右衛門・下村忠右衛門・土田友湖・河原林秀国・七條康教・井手善兵衛・駒沢利斎・木村平兵衛・飛来一閑・赤松則雄・高橋友七・飯田儀兵衛・美濃部忠兵衛・村上虎次郎・雲林院文蔵・永楽善五郎・雨森退輔、その他品評方補助 134人、審査は博覧会物類審査仮規則11条を定め、日割を定めて行なう。

３　受賞者（６・22 授賞式挙行）

○有功金牌１個　西洋機器摸製　造幣寮　大野規園

○銀牌17個（内訳　進歩１、有功10、妙技３、補助４）

○銅牌143個（内訳　進歩22、有功104、妙技５、補助12）

○進歩銅牌「牧童の図」今尾景年

○銅牌　錦光山宗兵衛

○褒状「鯉魚浮藻図」幸野楳嶺

○褒状　原在泉、巨勢小石「群蝶図」

○進歩銀牌　３代清風与平。

○ほかに４代高橋道八・並河靖之・紹美栄祐・８代中村宗哲・帯山与兵衛ら受賞。
京都博覧会沿革誌

日　　本

２・一　紙幣寮、石版印刷師ポラードを雇い石版印刷術を指導させる。

３・３　浅井忠、国沢新九郎の彰技堂に入門。

３・28　廃刀令発布により彫金の需要激減。

５・一～10・一　米国独立百年記念フィラデルフィア万国博開催（京都から出品：陶器　幹山伝七・和気亀亭、永楽善五郎、漆器　茶器商社・中村八郎兵衛・村上虎次郎・円中孫平、縮織　中川与兵衛、錦緞　西陣織工、縮緬　西村治兵衛、染色縮緬　鹿ノ子商社、刺繍　田中利兵衛・西村総左衛門、扇　木村藤助・住井善太郎・持阿弥浄円・底阿弥定暁・乗阿弥兵四郎・林阿弥半蔵、鉄葉瓶壺　村上虎次郎、陶器　紹美栄祐・篠山篤行・川原林秀国・河村弥三米、銅器　金谷五郎三郎、象嵌　四方安之助・並河靖之、写真　酒井虎造)。
京都貿易史

５・一　川崎千虎、『小学図画入門』出版。

７・26　文人画家　村瀬秋水没（享年82)。

８・29　伊国から画家フォンタネージ、彫刻家ラグーザ、建築家　カッペレッティ（装飾図案および用器画を教授)、工部美術学校教師となるため来日、契約書に調印。

８・31　小林清親、はじめて「東京新大橋雨中図」などの洋風木版画を発表。

11・６　工部省工学寮に工部美術学校を付設（校長大鳥圭介、画学・彫刻学の２科を設置。11・25彫刻奨励のため彫刻学科生徒に官費就学制を制定、12・14 女子生徒の入学を許可。画学科には五姓田義松・山本芳翠・松岡寿・中丸精十郎・高橋源吉・森本貞徳・浅井忠・守住勇魚・小山正太郎らが入学、わが国の洋画正則教育の始まり)。

12・一　森春濤、『明治詩文』創刊（明14・１『明治文詩』と改題)。

12・一　大槻文彦、『日本文学変革論』を著わして漢字の全廃、文字の改革を唱える。

この年

▷　森村市左衛門、森村組を設立（業務は陶磁器・漆器・銅器などの輸出)。

京　都　府

3・10～6・22　第6回京都博覧会[2]、大宮御所および仙洞御旧院に開催（出品数は非売品10,173点、売品156,591点。会場の区画は大宮御所内を分かち次の通り陳列分類を行なう。1大区：礦石類・建築石材・冶金術・化学上の製造物・筆墨硯朱肉・彫刻品・教育書籍その他、2大区：博物館蒐集品・銅鉄器利器の類・金銀玻璃七宝琺瑯等、3大区：御物・品評所・漆器・蚕絲絹布・刺繍および絹織物の染色・臙脂白粉首飾等の類・古書画・新書画、4大区：居家需要品・機織場・各種の紙、5大区：各女紅場・書画会席・樹林上の産物・建築図案および雛形機械・各種の車類農具および農業上の産物・療病院器械・焼窯術上の製造物・飲食物・観賞植物、6大区：園芸鳥獣）。
京都博覧会沿革誌

3・一　田能村直入、自寿筵を大阪広岡邸別荘に開き神仙像を描く。　直入居士伝

4・一　府、元仏学校教師レオン=デュリーの勧告を容れ、府下中学ならびに師範学校生徒8人を選抜、仏国に留学させ、府の殖産興業に必須の学芸を習得させることを決定（生徒：稲畑勝太郎・近藤徳太郎・佐藤友太郎・横田万寿之助・中西米三郎・横田重一・歌原重三郎・今西直次郎、11・20横浜港出帆、明11・1・22マルセイユに入港）。　稲畑勝太郎君伝

5・11　画家　塩川文麟没（文化5生、享年70、東山一心院に葬る）。　平安名家墓所一覧

6・4～16　第6回京都博覧会、審査書読会を開催（漆器・絹布は6日、刺繍・織物・鹿子・書画は7日、陶器は13日、書画・銅版は14日）。
京都博覧会沿革誌

6・10　幸野楳嶺、厳如上人九州布教の法駕に従い、邪馬溪・長崎・その他各地を歴遊。
楳嶺遺墨

6・16　陶工　初代真清水蔵六没（文政5京都生、幼名太三郎、享年56、鳥辺山通妙寺に葬る）。
京都名家墳墓録、京都工芸大観

7・一　菊池芳文、滋野芳園についてはじめて画業を学ぶ。　府庁文書 27-53

7・一　北方心泉が東本願寺の命を受けて上海へ赴く。　書道全集 25

7・一　富田幸七、蒔絵の改良の必要を痛感し上京、清川守貞につき制作（また柴田是真・小川松民をしばしば訪ねその製法を教わる。12月帰洛）。　京都美術協会雑誌 126

8・一　府、舎密局分局として宮津舎密試験所を設置（事業はすべて本局に準ずる、明14廃止）。
府誌下

9・8　府、西陣織物会所の設立とその趣旨を布達（これは西陣織物の粗製濫造を防止するためのもので、有名無実の西陣物産会社を廃止、製品検査・証紙貼用・職工および仲買商の免許制度の実施を申付ける。智恵光院一条上ル橋町に設立）。
西陣織物館記

9・一　荒木小平、国産最初のジャガード紋織機（二百の口、百の口各1台）を完成、第1回内国勧業博に出品。　同上

10・一　福富正水、『京都名所順覧記』の挿絵を銅版製作（色刷り）。　日本銅版画志

11・一　画家　村瀬雙石没（享年56、東山西大谷に葬る）。　平安名家墓所一覧

11・28　金工　8代中川浄益没（享年48、名吉右衛門）。　日本鋳工史

11・一　高島屋、縫師加藤辰之助を雇入れ、外人向き刺繍製作をはじめる。　高島屋135年史

12・一　南朝忠臣遺墨展覧会、清水寺成就院で開催（香風社主催、『南朝遺墨集覧』発行、巻首に万古遺芳の四字を山中信天翁が題字）。
書道全集 12

12・一　松田雪柯、上京して一六・鳴鶴と交わる。　同上

この年

▷　竹内棲鳳、土田英林に師事し画業をはじむ。
日本美術年鑑 昭18

▷　奥村松山、洋商アーレンス商会の求めに応じ多くの陶器を製作（明11から起立工商会社の製品を作る）。　陶磁器業者に関する取調書

▷　伊達弥助、オーストリア織物標本400種および内国織物標本3種を東京博物館に寄贈。
京都美術協会雑誌 3

▷　閑院宮家・一条家の入札行なわれる。
温知考

▷　2代松風嘉定、勧業場御用掛を命ぜられる。
陶磁器業者に関する取調書

▷　初代伊東陶山、墨画濃淡焼付法を発明。
初代陶山小伝

この年ごろ

▷　九谷陶工　尾形周平、京都で没（寛政12京都生、享年72以上）。　定本九谷

▷　粟田の名家　暁山忠兵衛没。
都市と芸術 昭6・5

▷　内海吉堂、中国へ渡る（明15帰国）。
名家歴訪録

参　考

(1)第1回内国勧業博覧会

受賞者

名誉竜紋

「模古銅器」秦蔵六

竜紋

「文房具及薫物」熊谷久兵衛

鳳紋

「鳥獣毛植細工」並河清右衛門、「鳥獣」舟木宗次郎、「紫檀書棚」堀田瑞松、「銅器」金谷五郎三郎、「銅鉄製器」四方安之助、「鉄葉製茶壺」村上虎次郎、「嵌鑲銅器」川原林秀国、「轆轤製小器」岡本重、「嵌鑲銅器」吉田新造

花紋

「偶人」清水次兵衛、「木竹茶具」駒沢利斎、「銀銅諸器」中川浄益、「嵌銅々器」篠山篤行

褒状

「銅瓶」紹美栄祐

竜紋

「友禅染」西村総左衛門、「刺繍」山崎倭文、「綾錦」矢代庄兵衛、「織物」小林綾造、「絹織物」織工房

鳳紋

「織物」西村治兵衛、「紋綾織」北川平八、「友禅染」大田平助、「刺繍」田中利兵衛、「金線」のせ義兵衛

花紋

「毛織綴錦」女紅場、「綴錦」中村半兵衛

鳳紋

「花瓶荷薬盆々及湯鑵」清水六兵衛、「大小花瓶茶壺」幹山伝七、「花瓶盆々」高橋道八、「陶磁」和気亀亭、「大小花瓶」清水七兵衛

花紋

「花瓶」永楽善五郎、「香炉」錦光山宗兵衛、「書棚陶板及敷瓦」丹山青海

鳳紋

「七宝諸器」並川靖之、「仏像」和田九右衛門

褒状

水彩画「鯉魚の図」幸野楳嶺、「華頂山雨景図」山田文厚、「高尾霜葉図」野村文挙、油絵「下賀茂社頭ノ図」田村宗立　同展審査報告

(2)第6回京都博覧会

受賞者（6・22授賞式）

有功金牌　時計　スイス　ファブルラント社、銀牌14、錦光山宗兵衛・真清水蔵六・清水六兵衛・3代清風与平ら有功1、進歩9、妙技4、銅牌66、有功10、進歩40、妙技8、雅致4、補助4、ほかに飯田新七・帯山与兵衛・並河靖之・4代高橋道八・森寛斎・幸野楳嶺ら受賞
京都博覧会沿革誌

日　本

3・12　洋画家　国沢新九郎没（弘化4生、享年31、彰技堂は本多錦吉郎が継ぐ）。

8・21～11・30　第1回内国勧業博覧会[1]、東京上野公園に開催〔(竜紋賞)菊池容斎「浅間山」・「水彩前賢古実図」、高村東雲・三浦乾也・柴田是真・小川松民、(鳳紋賞)五姓田義松、(花紋賞)滝和亭の「松樹牡丹」、小林永濯・渡辺小華・鈴木華村・高橋由一・山本芳翠ら、書道部では成瀬大城・小野田由典・服部和喜、工芸品はすべて輸出に適するか否かによって審査をする〕。

この年

▷　石井鼎湖、「玉堂富貴」を紙幣寮から出品（多色石版の最初）。

▷　大蔵省に図案調制所を設置。

▷　納富介次郎ら、東京牛込に江戸川製陶所を築く。加藤友太郎・竹本隼太らが活躍。

▷　工部省は工作分局（北品川）を設立し、英人技師を招いてフリントガラス、カットガラス等の製法を教授させる。

▷　勧工会創立（石川光明・旭玉山ら牙彫家を中心とした工芸団体、明20の東京彫工会の前身）。

▷　足利に染色研究所設立。

京　　都　　府

3・15～6・22　第7回京都博覧会[1]、大宮御所および仙洞御所に開催〔出品総数306,143点うち売品236,830点今回はじめて宮内省は桂御所(明16離宮と定められる）の拝観を許可、会場の区画は大体前年どおり。補助博覧として5・25、6・16の両日、書画会が開かれる〕。　京都博覧会沿革誌

3・一　府、独人ゴット=フリート=ワグネルをハー=アーレンスドイツ商社の紹介で府に招聘(ワグネルは舎密局本局内に併置された化学校で、理化学を教えると共に、陶磁器・七宝・硝子・染色などの改良研究にも従事、局内に陶窯を築造、さらに陶磁器実験工場を五条坂西大谷前北に設け、永楽和全・入江道仙らを招き、青磁の焼成発色などの化学的実験を行なう。明14初まで在洛)。　明治文化と明石博高翁、ワグネル伝

4・一　5代伊達弥助、大隈重信の母みゐ子の依頼により、彼女の手製による蓮絲(はすいと)で観音像42体を製織。　京都美術協会雑誌 127

6・19　篆刻家　淡海槐堂没（文政5生、享年58、吉田板倉墓地に葬る)。　平安名家墓所一覧

7・16　陶工　2代清風与平没(弘化元年生、号五溪、享年34、清水坂安祥院に葬る、養子清山晃浦が3代となる)。　京都工芸大観、京都名家墓所一覧

8・15　南画家　田能村直入、槙村知事に画学校設立を上申。　市立美工沿革略

9・9　高島屋2代飯田新七没（享年52)。　高島屋100年史

9・一　幸野楳嶺・望月玉泉の2名、久保田米僊・巨勢小石と謀り、再び画学校設立を知事に建議。　市立美工沿革略

9・一　新島襄住宅完成〔明11・5　着工、設計者未詳、洋風（コロニアルスタイル)〕。　京都の明治文化財

10・25　書家　前田半田没（享年62、新京極誠心院に葬る)。　平安名家墓所一覧

12・一　並河靖之、久邇宮家従を辞し、府勧業場職工御用掛となる（七宝研究に専心、透明真黒色を発明)。　京都美術協会雑誌 13、52

この年

▷　京都博覧会社、府に本年博覧会会況報告を提出（これは各府県産業の奨励進歩を目的とした審査報告ともいうべきもので、その中に京都の物産工芸について次の 記述がある。「京都府五条清水粟田等の陶磁器は昨年に比し、白磁且つ画様も大に進歩して輸出も増加し、西洋諸織物類は物品精良にして廉価たれば、多数の販売あり、絹布友禅も盛にして鴨川染の古風を有し、然して新模様を出し、最も亦賞すべきものあり、紅花玉糊染亦見る所あり（中略）其余着色画・淡彩画・油画等大に進歩せり」)。　京都博覧会沿革誌

▷　佐々木清七、織工場以外で、はじめて仏国製ジャガードにより広幅女帯地を製織、また国産ジャガード第1号を購入。　西陣織物館記

▷　3代入江道仙、大阪造幣局のるつぼを製造、以後理化学用陶磁器を専門に製作。　陶磁器業者に関する取調書

▷　山本利兵衛、独人ベンゲーイの依頼による蒔絵を製作。　京都美術協会雑誌 126

▷　千総(西村総左衛門)、天鵞(ビロード)友禅を発明（これにより以後、白天鵞に絵画を染出し、額面・屏風・壁掛などを製作しはじめる。従来、友禅染は縮緬のみ)。近代友禅史、宮崎友禅斎と近世の模様染

▷　田能村直入、出雲を遊歴し松江天神社に「梅花書屋の屏風」を献納。　直入居士伝

▷　巨勢小石、『七十二候名華画譜』を発刊。　名家歴訪録

▷　二条城（旧来ケ所没収品）の入札が行なわれる。　温知考

▷　石田有年、淡彩「俊寛喚船図」を第7回京都博覧会に出品。　日本銅版画志

▷　作品「色絵舞楽図花瓶」丹山青海。　京都の美術工芸100年展目録

参　　考

(1)第7回京都博覧会

1審査員（美術工芸関係のみ）

画　土佐光文、書画　雨森退輔・畑良平、織物　小西治郎右衛門・西村治兵衛、銅器　秦蔵六、漆器　浅野友七、彫刻　岩田半平、骨董　大橋四五六・能勢角右衛門、筆墨硯　福田墨蔵、絹布　西村総左衛門・2代飯田新七、金銀銅器　金谷五郎三郎、絹布染物　市田理八、表装細工物　松林良助、撮影硝子　吉田佐兵衛、利器　佐々木治兵衛、鉄葉細工　村上虎次郎、絵具染料薬　種紀藤兵衛、陶磁器　丹山青海・高橋道八・清水六兵衛・中村喜市

2受賞者（6・22授与式挙行)

金牌2、名誉賞　薫物黒方　熊谷久兵衛、有功賞　友禅染帛紗　西村総左衛門

銀牌37（進歩15、有功13、妙技7、補助2）3代清風与平・紹美栄祐(進歩)・錦光山宗兵衛・入江道仙ら

銅牌150(進歩28、有功98、妙技9、雅致2、補助13)

褒状331（特別95、補助222、特別褒状14）幸野楳嶺「堤籃荷花図」・並河靖之・荒木小平　京都博覧会沿革誌

日　　本

2・11　洋画家　山本芳翠、パリ万国博覧会に際し渡仏（その後エコール・デ・ボザールに入学)。

5・1～11・一　パリ万国博覧会開催〔京都から丹山青海・幹山伝七・並河靖之・金谷五郎三郎・川原林秀国・紹美栄祐・小林綾造・大橋弥兵衛・西村総左衛門・清水六兵衛・高橋道八・永楽善五郎・和気亀亭・舎密局・宮部甚八・村上虎次郎・中川浄益・河村弥三米・篠山篤行・吉田新造・吉田安兵衛・平田新七・村上藤七(大和錦)・安田善三郎（鹿の子絞)・田中利兵衛・山崎倭文（繡入額)・林阿弥繁蔵・熊谷久兵衛・清水七兵衛・坂口清兵衛・喜多川平八らが出品〕。　京都貿易史

5・14　大久保利通暗殺され、利通に寵愛された日下部鳴鶴は退官、書道の研究に専念。

6・16　日本画家　菊池容斎没（天明8生、享年91)。

7・一　浅井忠、学業優秀により工部美術学校から舶来の油絵具一式を授与される。

8・一　米人 アーネスト=フェノロサ、東京大学教師として来日。

9・30　フォンタネージ、工部美術学校教師を辞しイタリアへ帰国。

9・一　向山黄村、晩翠吟社を起し、毎月1回不忍池畔の湖心亭で雅会を開く。

11・一　浅井忠、小山正太郎、松岡寿ら、フォンタネージの後任フェレッチの技を不満として退学、十一字会を結成、洋画研究所を設立（研究所は明20小山正太郎の私塾不同舎となる)。

12・12　日本画家　春木南溪没（寛政7生、享年84)。

この年

▷　塩田真ら、美術工芸振興をめざし不忍池畔生池院で美術品評会を開く（翌年竜池会となる)。

▷　初代諏訪蘇山、宮内省の依頼で「李白観瀑の大陶像」を製作。

京　　都　　府

1・21　府下に画学校設立の旨趣を告諭

「画ハ美術ノ一ニシテ万般ノ事ニモ最モ緊要ナル学芸ナリ（中略）就中地理測量器械建築ノ学術百工製作ノ技倆総テ画以テ施業ノ基礎トス、是ニ於テ有志者斯ニ画学校ヲ創立シ此技芸ヲ精究セント希望シ既ニ寄附金ヲ出願スル者アリ、其志奇特ニ付速ニ該校ヲ興立セシメント欲ス、図画ニ従事スル者ハ勿論一般ノ衆庶ト雖モ此意ヲ了得シ費用ヲ助ケント志ス者ハ勧業場ヘ早々可申出候事」　市立美工沿革略、布達25号

3・15　織物業　初代川島甚兵衛没（享年61、子忰次郎は家名を継承して2代甚兵衛となる）。　恩輝軒主人小伝

3・15～6・22　第8回京都博覧会、(1)大宮御所および仙洞御旧院に開催(出品数、非売品5,639点、売品421,776点、なお本年は桂御所に加えて修学院上下御茶屋が拝観許可となる。

審査：審査規則を改正、規則7カ条を制定、物品審査および賞牌等級の決定は品評人3人以上により行ない、また品評人相互の見解の不一致の時は部長に再審査権を与えること、賞牌の基準は次の5事項に照して行なうこととした。「第1　農産物の新工夫を凝し進歩の著しきもの、或は有用の物品を発見せしもの、第2　製作を改良し或は産出を増加するもの、第3　美術において卓越せしもの、第4　衆に秀でし精巧物品を出せしもの、第5　有用の図書雛形を製せしもの」)。　京都博覧会沿革誌

3・29　書家　梁川紅蘭没（文化1生、享年76、南禅寺金地院に葬る）。　京都名家墓所一覧、書道全集 25

8・2　陶工　3代高橋道八没（幼名道三、名光英、号華中亭、享年69、高倉通五条下ル宗仙寺に葬る）。　京都美術協会雑誌 57、京都名家墳墓録

10・一　梅逕小学校講堂完成（設計者不詳、和洋折衷）。　京都の明治文化財

11・9　画家　土佐光文没（文化10・3・25生、享年68、百万遍知恩寺に葬る）。京都名家墓所一覧

11・29　槙村知事、文部省へ画学校創立を届出る。

「（前略）願意ヲ採用シ今般於府下校舎ヲ建設シ画学校ト名ケ課業ハ東西南北之四宗ニ（南宗北宗ハ旧来ノ称呼ニ順ヒ土佐派狩野風等皇国特別ノ画ヲ東宗トシ野画水画油画等ヲ西宗トス）大別シ学徒ヲ寄宿通学ノ二生トシ管ノ内外ヲ択ハズ教員者府下該業一般ノ公選ヲ用ヒ校長幹事等ノ職員ヲ置キ費用ハ総テ有志寄附金ヲ以テ支弁ス（後略）」。　市立美工沿革略

11・一　洋画展、東山雙林寺の文阿弥に開催、油絵・水彩画・素描等200点を陳列(田村宗立「洋童ノ図」・「不二川暁色ノ図」・「東京九段坂灯台」・「下鴨神社」・「洋婦人ノ像」など16点、久保田米僊「楠公読書の図」・「月衣海面の図」・「嵐山風景」など15点出品、他に東京から高橋由一「鮭の図」など16点、その他横山松三郎・亀井竹次郎・五姓田義松らが出品)。　油絵展観出品録

12・22　槙村知事、勧業場（河原町二条下ル）に上下両京区内の画に関係する工商93名を招集し画学校の創立に賛成し建築費補助の寄付金を募る。(2)　市立美工沿革略

この年

▷　春　堀川新三郎、初めて写染法を発明、これを同業者の広瀬治助・早川久兵衛に教える（広瀬治助はこれにより明12～13ごろ写染法、すなわち＜蒸し＞の方法を友禅縮緬に応用することに成功、この結果従来の本友禅＜描友禅＞は捺染友禅＜写友禅＞に移行していく、友禅の大変革)。　京都美術協会雑誌 35、友禅の変遷

▷　春　田中紋阿・田中文弥、東本願寺大門の三尊像を完成。　京都の明治文化財

▷　秋　2代川島甚兵衛、父の遺志をつぎ朝鮮貿易の有望性調査のため朝鮮に渡航。　恩輝軒主人小伝

▷　篆刻家　円山大迂、上海に渡り除三庚に師事し数年間滞留。　書道全集 25

▷　府仏国留学生、マルセイユからリヨンに移り各分担の学問技術を学ぶ（約1年間の仏語学校での修学の後、監督者デュリーが当初の目的に従って決定したもの。織物：近藤徳太郎、鉱山：歌原重三郎、製麻：横田万寿之助、製糸撚糸：今西直次郎、染色：稲畑勝太郎、陶器：佐藤友太郎、機械：中西米三郎、絵画および図案：横田重一)。　稲畑勝太郎君伝

▷　森寛斎、「仁徳天皇耕作豊年図」三幅対を制作。　日本画大成 13

▷　宮内省内匠課、新皇居御造営につき安政年間の皇居御造営に携わった工人を雇う。　東京日日 12・9

▷　府、米国大統領グランド将軍の来訪に際し、接待用洋食器を陶磁器製作者に命じる。　京都の明治文化財

▷　4代清水六兵衛、「土焼六角灯籠」を製作。　同上

参　　考

(1)　第8回京都博覧会

1　審査員

陶漆織物等60人、彫刻建築書画21人

2　受賞者

金牌4、進歩　加茂川染各種 西村総左衛門、銅器花瓶 紹美栄祐、妙技　琺瑯嵌 塚本甚右衛門・塚本三平

銀牌37（進歩5、妙技10、雅致1、有功9、補助6)、飯田新七（鴨川染）

銅牌9（進歩14、妙技18、雅致1、有功47、補助11)、3代清風与平・4代高橋道八・幸野楳嶺「巴姫力戦図」・6代和気亀亭「青華花瓶」・並河靖之・今尾景年・巨勢小石「観音像」・錦光山宗兵衛・飯田新七「刺繍帛紗大鏡背模様」ら　京都博覧会沿革誌

(2)　画学校設立に際し槙村知事の招集した工商人名

陶工：清水六兵衛・高橋道八・入江道仙・西山伊八・幹山伝七・錦光山宗兵衛、陶器商：藤田利七、呉服商：下村源蔵・飯田新七・井上七右衛門・熊谷市兵衛、書画商：熊谷久兵衛・島川長次郎・能勢駒次郎、七宝焼工：並川靖之、鉄葉工：村上虎次郎、銅器工：金谷五郎三郎・紹美栄祐、銅器商：吉田安兵衛・下村九兵衛・田中龜太郎、書肆：村上勘兵衛・出雲寺文次郎・田中治兵衛、玩弄品卸商：清水治兵衛・野村清右衛門、表具師：奥村清右衛門・松浦又三郎、仏画表具師：赤松定次郎、木綿問屋：辻忠郎兵衛・藤原忠兵衛、形付紺染工：田村治助・稲垣孫兵衛、漆器商：西村彦太郎、蒔絵工：浅野孫七、半襟商：山崎倭文、友仙染商：西村治兵衛・西村総左衛門・内貴清兵衛・多田佐一郎・市田理八、上代板引工：林長次郎、仏工：和田九右衛門、繍工：福井清七・大下藤七、織物仲買商：矢代庄兵衛・堀井久七・新賓八郎兵衛・森治郎右衛門・中村半兵衛・小西治郎右衛門、絵具染草商：紀藤兵衛・長瀬伝兵衛、扇子商：田村安兵衛、絵刷毛商：西村彌兵衛、扇子地紙商：内藤半右衛門、扇子商：平野久五郎、石工：岡野傳三郎、團扇商：綾喜助・鵜飼源三郎、大工：三上吉兵衛、綸子職工：小林伊助、紋職工：伊達彌助、絵絹仲買商：酒井長四郎・杉本伊助、秩紗商：田中利兵衛、友仙染工：山田宗七、縫箔工：安田新造・並河吉之助・金森吉兵衛、（市中女紅場世話掛ら23名は省略)。　市立美工沿革略

日　　本

2・一　浅井忠、東京師範学校図画教師となる。

3・15　塩田真・河瀬秀治・山高信雄ら竜池会を起す（会頭佐野常民、明13・6　機関誌『工芸叢談』創刊)。

3・一　キョソーネ、大久保利通の銅版肖像画を印刷完成（その後三条・木戸・岩倉の肖像銅版画を完成)。

5・1　大蔵省印刷局長得能良介、キョソーネらを伴い伊勢神宮・正倉院・桂宮など中部・関西・関東各地の古社寺の宝物調査に出発。

6・一　元老院の依頼により、高橋由一が天皇を、五姓田義松が皇后を、荒木寛畝が皇太后を油絵で描く。

8・8　日本画家　狩野雅信没（享年58)。

9・一～明13・4　濠州シドニー万国博開催（京都からは西村総左衛門が出品し受賞)。

9・一　文部省、学制を廃し教育令を公布（習字は読書についで第2位におかれ、重視される)。

この年

▷　濤川惣助、アーレンス商会（明8ワグネル・塚本貝助らにより七宝製造開始）の牛込工場をうけつぎ七宝製造開始、のち渡辺省亭の図案による無線七宝に成功。

▷　重野成斎、旧雨社同人中の有志と麗沢社をおこし、麹町清華吟館で月1回の雅会を開く。

▷　西洋絵具が次々に製造発売される。

▷　高村東雲没（享年54)。

▷　有田精磁社、九谷陶器会社創立。

この年ごろ

▷　この年から明14ころまで、疋田敬蔵、開拓使御用掛を命ぜられ北海道で北地風景の写生を行なう、職を辞して後も各地を遍歴写生する。

京　　都　　府

3・1～6・8　第9回京都博覧会[1]、大宮御所および仙洞御旧院に開催（この年も桂御所・修学院御茶屋の拝観許可。出品数、非売品2,985点、売品468,811点、補助博覧として5・25望月社千枚揮毫会、6・1諸家揮毫会開催。審査は品評人を多数選任し、慎重にする）。　京都博覧会沿革誌

3・25　府、染色研究のため染殿の伝習生　三田忠兵衛・高松長四郎に独国ベルリン留学を命ずる（8月出発、3年の滞欧中、主に更紗形あるいは絲染などについて研究）。
府庁文書 明21-46、稲畑勝太郎君伝

4・5　都路華香、幸野楳嶺の門に入る。
華香墨蹤

5・10　豊国神社、竣工し正遷宮を行う。
京都日日 5・7

5・一　西本願寺、中興法主の肖像を安置する堂宇建築を決定。　京都日日 5・29

5・一　京都博覧会社、博覧会を永久に存続開設することを府に請願（府土木課はただちに設計に着手。ワグネルの欧米諸国の博物館・博覧会場の参考意見をもとに、わが国に適した会場建設が目的）。　京都博覧会沿革誌

6・12　知事代理大書記官国重正文、勧業場に府下の画家43人を招き、画学校に協力するよう諭告。[2]　市立美工沿革略

6・17　京都府画学校、京都御苑内旧准后里御殿を仮校舎とし、創立事務の取扱いを開始。同上

6・19　京都府画学校規則を制定、出仕任用内記を定む。

第1条　本校ハ美術ノ美ヲ増進シ諸工芸諸製作ノ基礎ヲ正フセンカ為メニ設ル所ノモノナレハ入学ノ生徒此意ヲ誤ル事無ク事々補化益世ヲ目的トシ仮初ニモ遊手座食ノ弊習ニ染マランコトヲ要スベシ

第2条　画学ヲ分ツテ四宗トス曰東宗（土佐派円山派等所謂大和絵ノ派皆此ニ入ル）、曰西宗（野画油絵水画鉛筆画等皆此ニ入ル）、曰南宗（所謂文人画）、曰北宗（雪舟派狩野派等皆此ニ入ル）

第3条　宗毎ニ一塾ヲ置キ塾毎ニ教頭副教頭アリテ各其宗ノ生徒ヲ教授スベシ

（中略）

第5条　本校ノ事務ヲ取扱フ者ヲ幹事トシ用掛トス其事務吏員ト教員トヲ併セテ総管スル者ヲ校長トス

（中略）

第13条　本校ニハ教員生徒ノ外ニ出仕並生員ト称スル者アリ

第14条　出仕トハ本校出仕ノ命ヲ拝シタル者ノ異称ナリ

第15条　本校ノ教員ハ此出仕中ヨリ選挙スルヲ以テ常トス

第16条　未タ出仕ト為ルニハ至ラザル者ト雖モ現ニ幾分ノ技力アリテ図画ニ食スルヲ得ル者ハ名ケテ画学校生員トス

（下略）。　布達 260号

6・19　画学校、田能村直入を用掛に、先に招集された43人の画工を出仕に任用。
市立美工沿革略

6・23　画学校教員選挙会を開く。
市立美工沿革略

6・30　画学校、出仕望月玉泉（東宗）、小山三造（西宗）、谷口藹山（南宗）、鈴木百年（北宗）、幸野楳嶺（北宗）の5名に副教員を命ず。同上

6・一　勧業場、匠工組合に万寿寺の仏殿・金閣寺・銀閣寺・鳳凰堂などの保存を指示。
日出 6・24

6・一　彫刻家　田中文弥、東本願寺に下賜された御宸筆の勅額を彫刻。　京都日日 6・2

7・1　京都御苑内旧准后里御殿の仮校舎で京都画学校開校式を挙行。　市立美工沿革略

7・17　画学校北宗担当副教員鈴木百年依願退職、幸野楳嶺のみが北宗を教授。　同上

7・一　画学校、府下の画工および仏画師・土器画師・蒔絵師・友禅師等に至るまで悉く試験を行ないその等級を定める。　京都日日 7・30

8・27　画学校生徒を募集（一宗20人宛、入学年令14歳以上であるが、下等小学全科卒業生は14歳以下でも入校を許可）。
市立美工沿革略、布達332号

9・13　画学校副教員谷口藹山依願退職、南宗画担当の後任に出仕池田雲樵を任命。　同上

10・一　菊池芳文、京都に移住し幸野楳嶺の門に入る。　府庁文書 明27-53

11・6　画学校に変則生を置き入学許可達す。
布達 411号

12・2　画学校副教員望月玉泉、女学校写生画兼務を命ぜらる。　市立美工沿革略

12・5　人形師　清水治兵衛没（享年58）。
京洛人形づくし

この年

▷　西本願寺、開祖親鸞上人の一代記の図画を製作するため画工を召集。　京都日日 6・5

▷　富岡鉄斎、大島宮司を辞して京都に帰り、専ら画作に専念。　鉄斎

▷　4代高橋道八、宮内省の依頼により西洋食器一式を調達。　京都工芸大観

▷　金工　10代中川浄益没（名紹心）。
日本鋳工史

▷　田村宗立、油絵「茶摘之図」を京都博覧会に出品。　京都 昭16・9・15

↗

参　　考

(1)第9回京都博覧会

1　審査員（美術工芸関係のみ）

銅器・織物・彫刻・七宝・刺繍・竹細工は各1人、画・染物・画具は各2人、絹布・筆墨は各3人、漆器は4人、陶磁器6人

2　受賞者

金牌4、進歩金牌　西陣織物、西村治兵衛、有功金牌　鴨川染天鵞絨刺繍　西村総左衛門、その他製茶、亟繭。

銀牌34（進歩3、有功15、妙技13、雅致1、補助2）、錦光山宗兵衛、紹美栄祐、清水六兵衛、並河靖之、岸竹堂「嵐山図」、飯田新七「鴨川染刺繍帛紗」ら

銅牌112（進歩7、有功86、妙技14、補助5）、今尾景年、幸野楳嶺「寒月喜鵲図」、「花月蛛蜘図」、伊東陶山ら

褒状241、巨勢小石　擬油画「汽船図」、3代清風与平、佐々木清七ら　京都博覧会沿革誌

(2)勧業場に招かれた人（後日、画学校出任となる）。

望月	玉泉	前川	文嶺	林　耕雲
原	在泉	田村	宗立	中西　耕石
浅井	柳塘	池田	雲樵	松本　酔雲
鈴木	百年	今尾	景年	村瀬　玉田
桜井	百嶺	神服	木仙	岸　竹　堂
森	寛斎	森川	曽文	岡島　英昇
土佐	光武	舟田	濤山	村田　香谷
天野	方壺	谷口	藹山	巨勢　小石
鈴木	松年	山田	文厚	八木　雲溪
徳美	友仙	羽田	月洲	国井　応文
中島	有章	竹川	友広	久保田米僊
小山	三造	重	春塘	前田　荷香
小田	半溪	秦	金石	幸野　楳嶺
野村	文挙	伊沢	鶴年	加納　黄文
鈴木	瑞彦			以上43名

市立美工沿革略

↗　▷　府下染工の人員統計（茶染工58、助手(そけ)42、紺染工107、諸色引染工38、糸総紺染32、助手39、光艶社97、助手108、張物業239、助手74、手拭染工8、幟染工14、彩色工118、形彫52、糊置工166、助手89、紫染工41、錠染社31、助手30、中耕染13、白書(しらがき)工133、落し物工23、生糸練物9、練物工44、下組友禅更紗上代165、練物下工18、縫(ぬいや)工184、助手175、紋画49、上組更紗友禅上代117）。
京都日日 5・7

▷　粟田焼花生(ほないけ)の海外の評判高く、錦光山宗兵衛らは多数製造輸出。　京都日日 7・7

この年ごろ

▷　小山三造、石版画「老人」を製作。
日本版画美術全集 7

▷　堀川新三郎、オーストリア染業学士グスタフ=アドロフを雇入れ、白川友禅染と称して製造販売を拡張（明14・8・15火災にあう）。
京都美術協会雑誌 35

▷　宮津侯の入札行なわれる。　温知考

日　　本

1・一　『国華余芳』大蔵省印刷局より刊行（色石版による正倉院御物等の図集）。

2・2　伊人画家サン=ジョヴァンニ、工部美術学校教師として来日、契約書に調印。

3・一　吉田信孝、『西洋画手本』出版。

4・一　『臥遊席珍』創刊（主幹高橋由一、最初の美術雑誌、～8月＝5号）。

4・一　清国学者、書家楊守敬来日、六朝金石書道を鼓吹、日下部鳴鶴・巌谷一六・松田雪柯ら多大の刺激を受ける、明17・5帰国）。

4・一　第1回観古美術会開催（農商務省博物局主催、輸出工芸品の振興が目的）。

7・6　古社寺保存の内規を制定。

7・9　松岡寿、伊国に留学、五姓田義松は渡仏しレオン=ボンナの塾に学ぶ（松岡明22、五姓田明23帰国）。

この年

▷　勧業寮に図案協議員を設置。

▷　4代歌川豊国没。

▷　日賀田介庵没。

京　都　府

1・15　画学校、出仕等級表を制定（「等級ヲ十二等トシ大別シテ神品妙品能品入格の四区トシ毎区三等ニ小別シ教員助教員ノ位置ヲ定ム」）。
市立美工沿革略、文部省年報 9

1・28　府、修学院御茶屋保護の令を下す（国体明徴の上から従来の博覧会開催中の拝観が困難となる）。　京都博覧会沿革誌

2・5　京都博覧会場、御苑内に新築竣工（京都博覧会は第3期に入り以後約20年間この常設会場で毎年開催され、引続き殖産興業に貢献）。
同上

2・11　槙村正直議官、仏人ガメイ画の同氏肖像を画学校に寄贈。　市立美工沿革略

2・12　画学校、私立生徒画品検明規則を制定（「各画家ノ私塾生徒ニシテ其塾主ヨリ其画品ノ検明ヲ乞ウモノアレハ本印ノ割印ヲ与ウルノ規程ヲ定ム」）。　市立美工沿革略、文部省年報 9

2・23　画学校、府下の画を必要とする工業者を選挙し72人を用掛とする（「是レ他日工業科ヲ開設シ該用掛ヲシテ諸家工業上ノ下絵等ヲ本科ニ紹介サセ工職家ヲシテ不整ノ画ヲ用イシメス其栄誉ヲ進ンコトヲ欲シテナリ」）。
市立美工沿革略、文部省年報 9

2・—　2代川島甚兵衛、丹後縮緬改良に関する意見23条を知事に建白。　恩輝軒主人小伝

3・1～6・8　第10回京都博覧会[2]、新設の御苑内博覧会場および大宮御所御殿に開催（会場は5区にわかれ、美術工芸関係では第1区に陶磁器類、第2区に染織関係、第3区に漆器・彫刻関係、第4区に金工関係があり、別区大宮御所陳列所に古美術品・絵画・石版画および西陣物産8社の陳列がある）。　京都博覧会沿革誌

3・15　仏画師　八田花溪没（寺町本能寺源妙院に葬る）。　平安名家墓所一覧

4・21　画学校、用掛田能村直入に摂理を、副教員望月玉泉・幸野楳嶺・池田雲樵・小山三造の4人に3等教員を命ず。　市立美工沿革略

4・23　幸野楳嶺、画学校を依願退職、鈴木松年その後任となる。

5・19　幸野楳嶺画塾を幸野私塾と称しその制度を確立。　楳嶺遺墨

5・28　女流書家・歌人　高畠式部没（享年98、円山長楽寺に葬る）。　京都名家墳墓録

6・22　智積院本堂災上。
京都美術協会雑誌 125

9・3　府、画学校へ石版器械を付与、大蔵省印刷局から松井左金吾を招き伝習生を募りその術を教授する。　市立美工沿革略

10・—　幸野楳嶺、『楳嶺百鳥画譜』3冊を上梓。　楳嶺遺墨

10・—　田村宗立、石版画「有栖川熾仁親王像」を画学校で製作。　京都工繊大人文 10

11・4　松井左金吾、伝習終了帰京、以後画学校内に石版局を置き書画等を印刷。
市立美工沿革略

11・25　小山三造、画学校を依願退職、翌26日田村宗立その後任となる（小山はその後三条柳馬場東南の角家で石版印刷をはじめる。なお校内では日比野勇次郎・中村勝次郎が、校外では森三美が小山から指導をうけた）。
市立美工沿革略、京都洋画の黎明期

11・30　彫玉工　岩田半兵衛(半平)没（文政5・4京都生、享年53、号白玉堂、京極通り西林寺に葬る）。　京都美術協会雑誌 32、京都名家墳墓録

12・16　東福寺法堂・方丈・廻廊災上（明23再建）。　日出 昭8・8・9、京都美術協会雑誌 125

12・16　画家　島田雅喬没（享年74）。
京都美術協会雑誌 93

この年

▷　秋　竹内棲鳳、幸野楳嶺の門に入る。
栖鳳回顧展図録

▷　金工　森藤兵衛、本国寺擬宝珠を製作。
日本鋳工史

▷　神阪雪佳、鈴木瑞彦につき四条派の絵を学ぶ。　雪佳遺作集

▷　2代松風嘉定、これまでの小品陶器製造から丸窯の築造により、ようやく大器の製造に成功。
陶磁器業者に関する取調書

▷　2代川島甚兵衛、大阪の共同商会の依頼により朝鮮王室の結婚衣装および百官に賜う絹織物を調進（主に西陣で製織、琥珀などは桐生の機業者に委託、自から同地に出張し製造を監督）。
恩輝軒主人小伝

この年ごろ

▷　四条高倉辺に新友禅店が開店、盛況。
友禅の変遷

▷　広瀬治助、千総を退く（西洞院通丸太町下ルの自宅に友禅工場をつくり、写染、特に紅入写しの研究をおこなう）。
宮崎友禅斎と近世の模様染

▷　3代清風与平、釉薬を研究、色彩・紋様の工夫をする。　京都美術協会雑誌 17

参　考

(1)第2回内国勧業博覧会
受賞者
有功賞2等　深鉢　高橋道八
3等　花瓶　錦光山宗兵衛
協賛賞3等　陶製抹茶器　楽吉右衛門
褒状　磁器　幹山伝七、花瓶　帯山与兵衛、水指及香合　永楽善五郎
有功賞2等　銅器七宝花瓶　並川靖之
褒状　七宝龍灰皿　田中利兵衛、七宝古銅形花瓶　前田正盛
進歩3等　銅器　紹美栄祐
有功2等　各色銅器　金谷五郎三郎
3等　抹茶具　中川浄益、鉄瓶　四方安之助
褒状　銀製水注　橋本一至、彫鏤銅器　篠山篤行、鉄製香炉　河村三之助、銅器　佐藤宗三郎
有功3等　湯釜　大西浄寿
妙技賞牌1等　模古銅器　秦蔵六
3等　銅製花瓶　河原林秀国
進歩賞1等　天鵞絨加茂川染　西村組
妙技3等　水彩画「清水寺春景紅葉山水図」森川曽文、「西京見学」野村文挙、「深林猴鹿図」森寛斎、「水彩画屏風」村瀬玉田
褒状　「水墨米法山水」村田香谷、「水彩嵐山秋景」山田文厚、蒔絵棗形茶器　山本利兵衛、茶室建築　大井熊五郎
銀瓶　大同鉄平、錫器　山田源太郎、鉄葉細工　村上虎次郎、宜徳銅花瓶　紹美栄祐、銅花器　金谷五郎三郎、銅器　久保田伊三郎、鍛物　中川浄益、鋳器　秦蔵六、華銅水注　篠山篤行、華銅水注　川原林秀国、鉄瓶　四方安之助、仏木像　和田九右衛門、七宝焼　並川靖之
同展審査報告

(2)第10回京都博覧会
1　審査員（前年に準ずる）
品評人部長　中山精一・一井新吾・山本章夫・田中宣三・西村総左衛門
品評人　七宝・彫刻・織物・友禅・蒔絵・油絵各1人、銅器・陶器・織染各2人、画（田村宗立ら）5人、計47人
2　受賞者
金牌1、有功金牌　繭　福島県大橋濟
銀牌22、（有功11、進歩3、妙技5、雅致1、補助2）、錦光山宗兵衛・並河靖之・紹美栄祐・飯田新七「友禅染」ら、
銅牌66(有功39、進歩15、妙技4、補助8)、田村宗立「三都美人油画」、幸野楳嶺「孟」ら、
褒状133(補助褒状6)、原在泉・佐々木清七・3代清風与平ら受賞。　京都博覧会沿革誌

日　本

3・1～6・30　第2回内国勧業博覧会[1]、上野公園に開催（受賞者：名誉賞牌　旭玉山・七宝会社、進歩賞牌　西村総左衛門・後藤省三郎、妙技1等　加納夏雄・秦蔵六・柴田是真、妙技2等　河鍋暁斎「枯木寒鴉図」・滝和亭「設色花卉」・石川光明の牙彫・高橋由一「江堤夜景」・森川杜園、妙技3等　渡辺省亭「過雨秋叢図」・狩野永秀「白衣観音」・森寛斎「深樹猿鹿図」・五姓田義松「駿州清水湾曙図」、その他サン=ジョヴァンニ「婦人三絃図」・ラグーザ「日本婦人」評判となる。彫刻では牙彫が全盛、書道では長三洲・日下部鳴鶴らが入選）。

5・3　洋画家　川上冬崖自殺（文政10生、享年55）。

5・26　東京職工学校設立（明15・11・1蔵前で授業開始、明23東京工業学校と改称、窯業科を設置）。

5・—　第2回観古美術会開く（今回から竜池会が引継ぎ、明19第7回まで毎年1回開催）。

5・—　文部省、小学校教則綱領を通達、習字は必須科目とされ、なお重視される。

12・14　川村清雄、イタリア留学から帰国（明3政治・法律の研究のため米国留学、のち美術に転ずる）。

この年

▷　フェノロサ、第1回の日本美術講演を行う（邦画伝統尊重論を唱える）。

▷　彫刻家　長沼守敬、イタリアへ出発。

▷　岩城龍次郎、ガラス工場を建設。

京　都　府

1・29　画学校、始めて教員出仕の製作した絵画の展覧会を開催。　市立美工沿革略

2・25　画学校、第1回詩文会開催（詩人草場廉を評点者とし画家の専門的製作を奨励し、教養を高めるのが目的）。　同上

3・1～6・8　第11回京都博覧会[1]、御苑内博覧会場に開催（開催中余興として3・18～20 田村宗立の油画展、4・1、2、22および5・21 鳩居・佐梅両堂書画展が開かれる）。　京都博覧会沿革誌

3・一　高島屋、岸竹堂・今尾景年・伊達弥助・佐々木清七・榊原蘆江・村上嘉兵衛らを招き、刺繍・天鵞絨（ビロード）友禅などの美術的織物製作をはじめる。　高島屋100年史

5・1　画学校、小野十二郎・児島福蔵を石版技工に採用。　市立美工沿革略

5・12　画学校、画学講義を設け田能村直入・鈴木百年・森寛斎が担当する。　同上

5・12　近藤徳太郎、仏国留学から帰国（ジャガード等力織機・各種織物の研究実習・力織機の製作などを学ぶ）。　西陣史

6・21　中西耕石・山口吾水、画学校出仕を命ぜらる。　市立美工沿革略

8・21　古美術研究家　蜷川式胤没（天保6・5・23京都生、享年48、墓所東京谷中天王寺、分骨東寺の畔狐塚に葬る）。　陶器全集

8・一　府下社寺の古画を内国絵画共進会へ出品のため東京へ送る（教王護国寺「山水屏風」、高山寺「華厳祖師伝」「鳥獣戯画」、知恩院「法然上人絵詞」など）。　西京 8・27

9・一　幸野楳嶺・原在泉、第1回内国絵画共進会審査員として東上（久保田米僊は東京へでてから審査員となる）。　京都美術協会雑誌 19、名家歴訪録

10・9　画学校仮校舎旧准后里御殿、暴風のため破損、河原町織殿内に移転。　市立美工沿革略

10・12　仏人カステル、工部大学校美術部教師サン=ジョヴァンニとともに来校。　同上

10・15　泉涌寺霊明殿、災上。　京都美術協会雑誌 125

11・30　内国絵画共進会出品の下記の画、御用画を仰付けらる。

「大堰川御遊図」原在泉、「葡萄栗鼠図」森寛斎、「清水春雨図」鈴木瑞彦、「嵐山秋景図」羽田月洲、「嵐山春景図」森川曽文、「高山正之の図」田中栄次郎、「月の図」田村宗立　府庁文書 明15-14

12・4　絵画共進会出品の作品中、下記の作品御用品となる通知あり。

「月下擣衣図」幸野楳嶺、「修学院夏雨図」菊池芳文、「俊成郷図」村瀬玉田、「華頂山図」竹田春田　府庁文書 明15-14

12・15　内国絵画共進会出品者の内、古稀以上の者で画を善くする中西耕石・石原蘭石・羽倉良信、御用画を仰せつかる。　同上

12・一　田村宗立、油絵「亘平右衛門氏像」を制作。　京都工織大人文 12

この年

▷　梁川星巌の25年祭、紅蘭の3年祭が東西両京で行われる。京都では谷鉄臣・江馬天江・宇田渕・伊勢草山らがあっ旋し書画の揮毫などが行なわれる。　書道全集 25

▷　森寛斎、讃岐琴平宮の応挙筆襖絵を修理。　森寛斎遺作展

▷　この年から明27～28は新友禅による発展時代で染料も西洋の化学染料を用いたが、文様は依然として御所どきに有職趣味が圧倒的であった。　友禅の変遷

▷　田能村直入、大蔵省の画学校について建白書を提出（この後画学校が経費の点で工業学校化したので、南宗画学校の設立を計る）。直入居士伝

▷　西陣共進織物会社、中立売松屋町西入ル府授産場跡に設立（力織機を輸入使用）。　織物の西陣

参　考

(1)第11回京都博覧会

1　品評人

油絵・銅器・描金・織物・友禅染・刺繍・七宝各1人、漆器3人、織染・画（田村宗立ら）各4人など計70人

2　受賞者

金牌2　有功金牌　七宝窯花瓶　並河靖之、妙技金牌　歩障剪綵孔雀牡丹図　三井高福

銀牌18（進歩3、有功10、妙技2、補助3）、6代和気亀亭（青華梅花紋鉢）・紹美栄祐・錦光山宗兵衛・清水六兵衛ら、

銅牌85（進歩11、有功64、妙技2、雅致3、補助5）、今尾景年・2代松風嘉定・3代清風与平・伊東陶山・飯田新七（琥珀地帛紗疎竹織月の図）ら

褒状159　補助褒状7、真清水蔵六・菊池芳文・佐々木清七ら受賞　京都博覧会沿革誌

(2)第1回内国絵画共進会(京都関係のみ)

審査官　幸野楳嶺(塩川派)・久保田米僊(北宗派)・原在泉(原派)

受賞者

銀賞（円山派）森寛斎

銅賞（原派)原在泉・(鈴木派)今尾景年・(南宗派）谷口霞山・(南宗派）田能村直入・(南宗派)中西耕石・(鈴木派)鈴木百年・(歌川派)中井芳能・(呉春派)村瀬玉田・(呉春派)野村文挙・(北宗派)久保田米僊・(塩川派)菊池芳文・(円山派)森川曽文・(塩川派)鈴木瑞彦

褒状

土佐光武・巨勢小石・鬼頭道恭・鶴沢探真・池田雲樵・中西松石・村田香谷・塩川文鵬・重春塘・森春岳・鈴木百僊・森琴石・木下広信・河辺華挙・跡見玉技・望月小蟹・田村宗立・榊原文翠

絵事著述褒状

『雲樵画譜』池田雲樵、『集石名公画式補成』村田香谷、『楳嶺百鳥画譜』幸野楳嶺。

絵事功労褒状

田能村直入・中西耕石・久保田米僊・幸野楳嶺・巨勢小石・望月玉泉（京都画学校設立に尽力したことによる）。　内国絵画共進会審査報告付録

日　本

1・15　仏人画家ビゴー来日（10・15から明17・10・14まで陸軍士官学校教師、明32ころまで滞日）。

2・7　漆工　橋本市蔵没（文化14生、享年66）。

3・20　コンドル設計の上野博物館（のちの東京帝室博物館）成り、開館式(大12大破)。

5・14　フェノロサ、竜池会で日本画保護論（美術真説）（10月刊、大森惟中筆記）を講演。

5・一　小山正太郎、『書は美術ならず』（東洋学芸雑誌7月号)を発表、（岡倉天心、『『書は美術ならずの論』を読む』、同誌8～12月号で反論)。

8・24　画家　安田老山没（天保1生、享年53)。

10・1～11・20　農商務省主催第1回内国絵画共進会[2]、上野公園に開催。洋風画の出品拒否される（受賞者は銀賞　狩野探美「嫦娥之図」、橋本雅邦「人物」、森寛斎「張良」「葡萄と栗鼠ノ図」、田崎草雲「穐山晩暉」、野口幽谷「黄白菊花図」、銅賞　川辺御楯「尹大納言叡山行図」、川端玉章「道生馬」、佐竹永湖「王昭君の図」、今尾景年「鯉魚」など)。

10・一　大阪の浮世絵師、松川半山没（その風景版画は玄々堂一派の銅版画に大きな影響を与える)。

12・一　工部美術学校画学科も廃止となり、美術学校は閉鎖。

この年

▷　桐生・足利の機業盛ん。

▷　山本芳翠、「西洋婦人像」制作。

この年ごろ

▷　ワグネルの指導により、加藤友太郎（友玉園陶寿）牛込新小川町に洋式陶窯を築く。

京　　都　　府

1・11　府下の有名画工、洛東円山正阿弥に集会。　西京 1・2

1・17　久保田米僊、御用画仰せつかる。　西京 1・12

1・23　羽倉可亭、画学校出仕となる。　市立美工沿革略

3・1～6・8　第12回京都博覧会[1]、御苑内博覧会場に開催（本年は府官吏よりの嘱託を取り止め若干の品評委員のみで審査を行なう。余興として3・11 霧山社中画会ならびに開期中古画の展覧会を開催）。　京都博覧会沿革誌

3・23　竹内棲鳳・菊池芳文ら、画学校出仕となる。　市立美工沿革略

5・—　幸野楳嶺、『工業図式』5冊を上梓。　楳嶺遺墨

6・4　陶工　3代清水六兵衛没（文政3京都生、名栗太郎、号祥雲、享年64、西大谷に葬る）。　陶磁器業者に関する取調書、当代聞き込み

9・16　篆刻家　安部井櫟堂没（文化5生、享年56、円山安養寺に葬る）。　平安名家墓所一覧、大阪朝日 12・2、書道全集 25

9・25　葛野郡下桂村桂宮別邸を桂離宮と改める。　大阪日報 9・29

11・12　菊池芳文、画塾を御池油小路西入ルの竹内栖鳳旧宅に開業する。　日出 大7・1・19、楳嶺遺墨

11・—　岸竹堂、京都御所御常御殿襖に「谷川に熊図」製作を仰せつかる。　京都美術協会雑誌 50

11・—　画学校、各画学家の所見を発表して世論を鼓舞し画学の振起をはかるため、画事集談会規約を制定。　府誌上

11・—　袋師　6代土田友湖没（名半四郎、享年80）。　淡交テキスト茶道具編

12・18　龍池会の依嘱により画学校教員揮毫の出品画67点を校内に陳列。　市立美工沿革略

12・—　染殿伝習生　高松長四郎、ドイツ留学から帰る。　府庁文書 明19-71

12・—　西陣織物会所、西陣織物同業組合に改組（明18、西陣織物業組合と改称）。　西陣織物館記

この年

▷　初代三浦竹泉、初めて独立創業（これまで13歳の時から17年間3代高橋道八門に入り修業）。　京都工芸大観

▷　オランダ　アムステルダム博覧会へ画学校生徒成績品を出品し金牌を受く。　市立美工沿革略

この年ごろ

▷　永井喜七、繻子製織用としてバッタンを改良。　西陣史

▷　谷口香嶠、幸野楳嶺の門に入る。　府庁文書 明27-53

参　　考

(1)　第12回京都博覧会

1　品評委員

油絵・七宝・銅器・描金・漆器描金・染物・刺繍押画各1人、漆器2人、織物3人、織染4人画（田村宗立ら）5人など計76人

2　受賞者

銀牌8（進歩2・妙技1・有功5）、紹美栄祐、伊東陶山ら

銅牌58（進歩7・妙技4・有功42・雅致3・補助2）、田村宗立「涅槃像大幅」、4代高橋道八、錦光山宗兵衛、清水六兵衛、3代清風与平、真清水蔵六ら

褒状160、補助褒状3、佐々木清七、巨勢小石「観音像」、菊池芳文ら受賞。　京都博覧会沿革誌

(2)　第1回巴里日本美術品縦覧会京都画家出品目録

「牧童図」鈴木百年、「蘆に鴨図」今尾景年、「嵐山春暁図」野村文挙、「嵐山春雨図」幸野楳嶺、「大原春景図」森寛斎、「糺森夏夜図」望月水泉、「高雄秋景図」森川曽文、「宇治秋景図」久保田米僊、「婦女観桜図」中井芳龍　京都に於ける日本画史

日　　本

1・23　工部美術学校廃止（創設後卒業証書を受けたもの35人）。

2・11　サンニジョヴァンニ、工部美術学校教師を解かれ、帰国。

3・10　銅・石版画家　岩橋教章没（天保3生、享年52）。

3・—　法隆寺から献納された宝物、上野博物館で初公開。

5・30　日本画家　住吉広賢没（享年49）。

5・—～10・—　オランダ　アムステルダム万国植民地産物および一般輸出品万国博開催（京都より村上虎次郎、田中利兵衛、錦光山宗兵衛、帯山与兵衛、紹美栄祐、幹山伝七、宮部丑三郎、児島定七、丹山陸郎、並河靖之ら出品）。京都貿易史

6・8　第1回日本美術縦覧会[2]、パリで開催（竜池会主催、日本画新作51点、古画22点を出品、文人画を極度に制限）。

7・—　ワグネル・植田豊橘、東大理学部の実験室で吾妻焼（のちの旭焼）の研究に着手(明18春成功し、共進会に出品)。

9・2　七宝家　梶常吉没(享和3生、享年81)。

10・—　『竜池会報告』創刊(創刊号のみ、明18・6復刻～同20・12)。

11・30　『大日本美術新報』創刊(鴻盟社発行、大内青巒主宰、竜池会の機関雑誌の性質をもっていたようである。～明20・12)。

11・—　『維氏美学』上冊発行（ヴエロン著、中江兆民・野村泰亨訳、文部省刊、下冊明17・3）。

この年

▷　洋画家、大会を開いて劣勢挽回を相談。

▷　桐生では京都からバッタン、続いてドビー機を購入。

京　　都　　府

1・9　画家　中西耕石没（福岡県生、享年78東山霊山に葬る）。　平安名家墓所一覧

2・1　画学校、余科教授実施法を定め、翌2日から教授を始める。　市立美工沿革略

2・1　漆工　8代中村宗哲没（享年58、名忠一、号到斎、聴雨）。　京都美術協会雑誌 8

2・27　笠井喜佐吉、画学校校長心得となる。　同上

2・一　田能村直入、画学校を退職する。　市立美工一覧 明45

3・1～6・8　第13回京都博覧会[1]、御苑内博覧会場に開催（余興として谷口靄山社中は構内池塘の別亭にて土曜もしくは日曜に画会を開く）。　京都博覧会沿革誌

3・24　仏国滞在の稲畑勝太郎、レオン＝デュリーの申請により府から留学延期許可を受ける（12月まで。稲畑勝太郎はリヨン大学に入りローラン教授につき応用化学を専攻）。　稲畑勝太郎君伝

4・19　府、高松長四郎を勧業課御用掛に任命。　府庁文書 明19-71

5・一　菊池芳文、画学校出仕を辞す。　府庁文書 明27-53

6・一　幸野楳嶺、竹内棲鳳ら祇園中村楼にてフェノロサの美術講演を聞き、フェノロサの訪問を受ける。　楳嶺遺墨

7・30　金工　3代龍文堂安之介没（京都生、幼名亀次郎、享年69）。日本鋳工史、京都工芸大観

7・一　伊藤快彦、田村宗立に入門、油絵を学ぶ。　京都洋画の黎明期

9・3　府、三田忠兵衛を勧業課御用掛に任命。　府庁文書 明21-46

9・6　画学校、展覧会製作並に取扱規程を改定し、毎月の開会を改めて1年4回とする。　市立美工沿革略

10・20　画学校、生徒の画学研究会を開く（「画学書、歴史等ノ書籍中ヨリ本科ニ有用ナル章句ヲ選抜シテ問題トナシ之ヲ学生ニ講授ス」。　文部省年報 12、同上

10・一　織殿を仮用して来た府立画学校は上京区合薬会社の建物を買入れ、同処へ河原町の旧勧業場の落成次第移転計画。　立憲政党新聞 10・26

10・一　画学校、草場廉を採用し修身学講義会を開く（以来毎月開き教授）。　市立美工沿革略

11・一　幸野楳嶺、『楳嶺百鳥譜続篇』3冊を上梓。　楳嶺遺墨

12・22　画学校、生徒の新画競進会を開く（「学生新作ノ図画ヲ出品セシメ公衆ノ観ニ供シテ大ニ競進ノ気運ヲ作ラシメ更ニ教員其品評ノ当否ヲ説示スルニ由ルヘシ」）。　文部省年報 12、市立美工沿革略

12・一　同志社彰栄館完成（明16・11着工D.C.グリーン宣教師設計アメリカン・ゴシック式）。　京都の明治文化財

この年

▷　田能村直入、京都府画学校を辞し私費をもって南宗画学給費私塾を設立（20名の給費生、田能村小斎、依田友石ら10名が指導）。　直人居士伝

▷　府、皇居御造営事務局の依頼により御用織物取調べのため、近藤徳太郎・2代川島甚兵衛に上京を勧める。　恩輝軒主人小伝

▷　2代川島甚兵衛、川島西陣織物工場を設立。　同上

▷　勧業場内の府営の博物館を閉鎖。　京都国立博物館70年史

▷　原熊太郎（号撫松）、画学校西宗科を卒業（のち上京して森村市左衛門に見出され、英国に8年留学、レンブラントに傾倒、帰国後品川にて名士の注文画を描く）。　京都洋画壇の今昔

この年ころ

▷　世をあげての粗製品時代に、友禅だけは画期的に向上（一流画家が下絵を描くことを恥としないようになってきたため）。　京都博覧協会史略

▷　仏人ビゴー、石田有年から銅版彫刻を学ぶ（明17か18）。　日本銅版画志

参　　考

(1)　第13回京都博覧会

1 品評委員

筆墨、玻璃（硝子）各3人、琺瑯・扇類各4人漆器・彫刻各5人、刺繍裁縫6人、画（田村宗立、巨勢小石ら）7人、陶器・銅器各8人、織物9人ほか計133人。

2　受賞者

銀牌13（進歩1、有功8、妙技3、補助1）、幸野楳嶺「施鹿林図」、田村宗立「自画肖像油絵」ら

銅牌47（進歩2、有功32、妙技9、補助4）

特別褒状22、特別補助褒状3、褒状163、補助褒状2

並河靖之（特別金賞状）、伊東陶山、真清水蔵六3代清風与平（妙技賞牌）、紹美栄祐（特別褒状）ら受賞　京都博覧会沿革誌

(2)　第2回巴里日本美術縦覧会京都画家出品目録

「金閣寺図」原在泉、「田園秋稼図」森川曾文、「漁夫図」・「山水図」・「柳下垂釣図」久保田米僊、「松竹図」・「廃荷水禽図」幸野楳嶺、「紅葉瀑布図」・「水中鯉魚図」今尾景年、「釣瓶に梅図」・「阿弥陀像図」巨勢小石、「水中鯉魚図」羽田月洲、「源義家図」駒井龍仙、「紀貫之図」榊原長敏、「花鳥図」・「樹下牛を牧する図」岸竹堂、「蓬莱山水図」鈴木百年、「月下桜樹図」竹内棲鳳、「梅花十二種図」跡見玉枝、「竹林群鶴図」・「月下秋草図」望月玉泉、「雨中清水閣図」・「孤鹿図」・「京都東山図」野村文挙、「奇峰初冬図」・「雨中牡丹図」・「寒山拾得図」村瀬玉田、「宇治川景図」菊池芳文、「松に小禽図」・「孔雀図」今尾景年。　京都における日本画史

(3)　第2回内国絵画共進会

受賞者（京都関係のみ）

銀賞（塩川派）幸野楳嶺、（北宗派）久保田米僊、（南宗派）田能村直入、（鈴木派）鈴木百年。

銅賞（原派）原在泉、（巨勢派）巨勢小石、（南宗派）池田雲樵、（岸派）岸竹堂、（南宗派）重春塘、（歌川派）岡木春貞、（歌川派）中井芳瀧、（呉春派）村瀬玉田、（塩川派）菊池芳文、（望月派）望月玉泉、（鈴木派）今尾景年、（鈴木派）鈴木百優。

褒状

田中有美、鬼頭道恭、榊原長敏、根木雪峨、秦金石、永井香浦、村田香谷、山口吾水、塩川文鵬、森春岳、田能村小斎、木下広信、羽田月洲、長谷川玉純、河辺華挙、竹内棲鳳、中島有章、野村文挙、国井応文、山田文原、山本桃谷、深田直城、駒井龍仙、佐々木五溪、清水麓松、森川曾文、鈴木瑞彦、中川芦月、畑仙齢、植村景山、鈴木万年、田中一華、田村宗立「不動明王」

大日本美術新報6、7、第2回内国絵画共進会記録

日　　本

2・2　黒田清輝、仏留学のため横浜を出発（渡仏中に法律学から画学に転ずる、明26・7・30帰国）。

2・一　フェノロサら、鑑画会結成（古美術を展覧、狩野永悳、山名貫義、狩野友信、フェノロサを鑑定委員とし、作品の真偽優劣を鑑定）。

4・11～5・30　農商務省主催第2回内国絵画共進会、上野公園で開催[3]、洋風画を除外（受賞者、金賞　守住貫魚「高綱宇治川先登図」他。銀賞川辺御楯「驟雨」・「菊池憤戦図」、山名貫義「藤房奉勅訪楠氏」他、橋本雅邦「山水八仙」・「獣」、狩野永悳、滝和亭、野村幽谷、田能村直入、久保田米僊、田崎草雲、幸野楳嶺ら。狩野芳崖の「桜下勇駒図」「山水」は褒状にとどまったがフェノロサに認められる）。

5・6～6・20　第2回日本美術縦覧会、パリで開催[2]（竜池会主催、日本画家152人の作品250点を出品）。

5・6　奈良正倉院を宮内省に移管（明8・4内務省所管、同15・4　農商務省所管）。

6・9　岡倉天心・フェノロサ、京阪地方の古社寺歴訪を命ぜられる。出張中、法隆寺夢殿を開扉、救世観音菩薩像を調査。

7・一　文部省に図画調査会を設置。岡倉天心、フェノロサら普通教育に毛筆採用を主張、鉛筆画採用を唱える小山正太郎、敗れて委員を辞する。

7・一　渡辺小華・川辺御楯ら、東洋絵画会を結成、10月『東洋絵画叢誌』創刊（明19・6の第16集まで、明20・2『絵画叢誌』と改題）。

10・15　洋画家　横山松三郎没（天保9生、享年47）。

12・一　曽山幸彦ら、美術会結成、私立の美術学校を設立（東京麹町）、のち曽山は私塾を芝に開く、明25・1　没後、松室重剛、堀江正章がこれを承継し大幸館画塾と称する。

この年

▷　高橋由一の天絵学舎閉鎖。

▷　岡倉天心、竜池会の録事となる。

▷　足利に染色講習所開設。

▷　楊守敬が帰国（在日5年、彼は日本に残存する古書を採訪で『日本訪書誌』を著わす）

京　　都　　府

2・一　漆工　初代木村表斎没。
京都貿易史

3・1～6・8　第14回京都博覧会[2]、御苑内博覧会場に開催（余興として各種画会の席上揮毫を開く。4・5南宗画家、4・19水石会、5・1鈴木百年門下生、5・10及び6・1望月派千枚絵施行、5・15谷鳳社員大和絵派、5・17如雲社、5・24塩川派、5・29画学校教員及び生徒、5・31及び6・6白雲社員、5・30及び6・6古画陳列を開く。
品評委員　絵画24人、織染18人、陶銅漆器その他諸雑品37人等、計112人）。
京都博覧会沿革誌、日出 5・28

3・一　富田幸七、独立創業。
京都美術協会雑誌 126

3・一　幸野楳嶺、竹内栖鳳とともに東本願寺法主厳如上人および光演師に随い、北越地方を巡遊。
楳嶺遺墨

4・10『日出新聞』創刊（『京都新聞』の前身。本紙には美術および美術工芸に関する記事が多い）。
日出 4・10

4・一　幸野楳嶺・森寛斎・鈴木百年ら、名流会を結成。
日出 6・27

5・19　画学校、石版部印刷内規を定め、官公庁および民間の需要に応じ、書画・達文・広告・規則書・証書・商標等の印刷を始める。
市立美工沿革略

5・22　書家　山中信天翁没（文化3生、享年64、南禅寺天授庵に葬る）。
書道全集 25

5・一　佐々木清七、蓬莱織と称する新意匠の織物（佐々木織）を発明。
京都美術協会雑誌 33

6・1　画学校、元勧業場跡へ移転。
市立美工沿革略

6・3　琵琶湖疏水の起工式に付随し書画展観揮毫の席を祇園町小学校・正伝院などで開催。
日出 6・4

7・1　画学校、従来の四宗に加え石版科を設置（明19・9廃止）。
日出 5・14

7・一　稲畑勝太郎、仏国留学から帰る（帰国後山梨県甲斐絹産地を視察、約1カ月間その改良方法を指導、なお稲畑ら7人の留学生中、歌原重三郎・横田重一は客死）。
稲畑勝太郎君伝

8・12　農商務省布達組合準則に基づき、京都刺繍業組合設立（他にこの月、粟田陶商工組合設立、ともに粗製濫造防止・優良品奨励が目的）。
日出 8・13、15

8・13　稲畑勝太郎、8月初旬京都に帰りこの日付けで府勧業課御用掛を命ぜらる。
稲畑勝太郎君伝

8・19　府、与謝・竹野・中3郡の業者に丹後縮緬改良を諭告。
日出 8・20

8・一　染色業者、工業視察のため在洛中の東京職工学校長正木退蔵、農商務省技術師兼東京職工学校教諭平賀義美を招き懇談会を開催（府の勧業課役人も出席、平賀は染業教育について論じ、また染色試験を行い当業者の注意を促す）。
実業教育50年史

9・5　陶工　初代小川文斎没（享年77）。
湖東焼の研究

9・一　高島屋、常設画工室を設置（田中一華、岸竹堂ら担当、このころ流行の錦水豆書友禅に従事）。
高島屋100年史

10・6　書家　宮原節庵没（文化3・10・8、広島県生、享年80、大徳寺黄梅院に葬る）。
平安名家墓所一覧、書道全集 25

10・27　府、社寺所蔵の宝物古文書の保存を達す。
布達甲161号

11・11　高知県絵画共進会への京都出品画展、妙心寺で開催（画学校教員の作などが当選）。
日出 11・13

11・一　二条離宮天井画、巨勢小石らの修理始まる。
日出 11・28

11・一　京都飾銅器商工組合、下京30組西境町140番に設立（尾形飾・襖引手・彫物・鋲鈴・花簪・金銀小細工・煙管工・ブリキ工等の飾具に従事する職工達が設立）。
同上

12・一　金工（釜）初代高木治郎兵衛没（文政11・6生、号近江屋、大西10代浄雪の門人、享年56）。
日本鋳工史

この年

▷　岸竹堂、明宮殿下御用画「野馬」・「楓小禽図」製作仰付らる。
京都美術協会雑誌 50

▷　山元春挙、森寛斎の門に入る。
春挙遺芳

▷　京都府下の画工

諸風画専修者	161人	将来者	15人
仏画専修者	11人	将来者	2人
陶器画専修者	118人	将来者	15人
蒔絵画専修者	12人	将来者	なし
上絵及び友禅画専修者	293人	将来者	10人

（将来者とは目下修業中の人）。
日出 9・15

▷　野村芳圃・池田房次郎、大阪のしにせ綿喜、前田喜次郎と共同で『京阪名所図絵』を出版（これは川村清親に学びながら、応挙の眼鏡絵以来の上方洋風画の回復を計ったもの）。
日本版画美術全集 7

▷　幸野楳嶺、「帝釈試三獣図」を描く。
京都の明治文化財

参　　考

(1)　第10次奈良博覧会受賞者（5・28授与式）
1等金牌　「月下叢芒図」岸竹堂、秦蔵六、並河靖之、紹美栄祐ら。
2等銀牌　「西洋少女油画」田村宗立、佐々木清七ら
日出 7・15、京都美術協会雑誌 34、52

(2)　第14回京都博覧会受賞者（6・4授与式）
有功賞銀牌　「七宝焼壺」並河靖之、「嵌金小筐」紹美栄祐
妙技賞銀牌　「蓬莱山図」森寛斎
特別褒状特銀　「押絵額」田中利兵衛
有功賞銅牌　「本朝有名画家肖像」岡本春暉、「黄銅花瓶」橋本一至、「嵌金丸盆」金谷五郎三郎、「鉄菓子器」稲葉七穂、「陶花瓶」帯山与兵衛、「陶花瓶および陶壺」錦光山宗兵衛、「平塩瀬」熊谷市兵衛
妙技賞銅牌「龍虎図」岸竹堂、「夏雨跳蛙図」幸野楳嶺、「孔雀図」今尾景年、「熊野本宮図」原在泉、「京極実輔図」畑在周、「楠公決死図」森川曽文、「寒林双猿図」山田文厚、「鳥羽僧正図」榊原長敏、「蹴鞠図」児島清文、「威振八荒図」久保田米僊、「渓澗秋月図」野村文挙、「富嶽図」望月玉泉、「暁桜図」山本桃谷、「蓬莱山図」鈴木松年、「保津川図」（屏風）田村宗立、「木彫羅漢像」平井芳兵衛
雅致賞銅牌　「秋山水図」重春塘、「梅林図」池田雲樵、「蜀桟道図」谷口靄山、「孤山高隠図」村田香谷、「秋山水図」森琴石
褒状　「物部大連図」河辺華挙ら
日出 6・10

(3)　東京五品共進会受賞者
2等賞　伊達弥助、佐々木清七、木村表斎ら
3等賞　「葵祭ノ図」2代川島甚兵衛、西村治兵衛、永井喜七ら
4等賞　飯田新七、4代高橋道八、3代清風与平ら
日出 9・22

(4)　愛知県五県聯合絵画共進会受賞者(10・8授与式)
1等賞　森寛斎
2等賞　幸野楳嶺、久保田米僊、森川曽文
3等賞　山本桃谷、田村宗立、巨勢小石、畑在周、今尾景年、野村文挙、望月玉泉、池田雲樵、菊池芳文ら
日出 12・25

日　　本

3・一　大日本織物協会創立。

4・1～6・20　農商務省、繭・生糸・織物・漆器・陶器の五品共進会[3]を上野で開催。

4・一　東洋絵画展覧会、上野不忍池生池院で開催（東洋絵画会主催、岸竹堂、幸野楳嶺ら学術委員となる）。

5・一～11・一　ロンドン万国発明博覧会開催（京都から並河靖之、七宝会社、紹美栄祐、丹山青海、山本安兵衛ら受賞）。
京都貿易史

6・15～9・30　ニュルンベルク万国金工博覧会開催（京都から秦蔵六、金谷五郎三郎、紹美栄祐、橋本一至、河原林秀国、河村永之助、宮部互三郎、中川浄益、並河靖之、饒村善蔵(三)、佐藤義照、家辺菊次郎の12人銀牌および記念牌を受賞）。
京都貿易史

6・一　浅井忠、柳源吉共著『小学習画帖』出版。

9・11～13　第1回鑑画会、東京両国中村楼で開催（狩野芳崖「伏竜羅漢」を出品）。

9・15～10・14　五県聯合絵画共進会[4]、愛知県名古屋博物館で開催（森寛斎ら出品）。

11・11　足利商工会など同地方の有志、足利織物講習所を設立（足利織物の信用回復を目的に、和洋折衷染色の実習を行う）。

12・10　文部省、省内に図画取調掛を設置（図画教育に関する事項を調査、岡倉天心が掛長、明20・10・5東京美術学校となる）。

12・21　高橋由一、＜展画閣ヲ造築セン事ヲ希望スルノ主意＞を元老院議長佐野常民に提出。

この年

▷　藤雅三、渡仏（ラファエル＝コランに師事）。

▷　前田黙風、渡清し金石学および書法を研究。

▷　英国発明品博覧会開催（京都では並河靖之、紹美栄祐、丹山青海、山本安兵衛、帯山与兵衛らが受賞）。

▷　第10次奈良博覧会開催[1]（岸竹堂ら出品）。

京　　都　　府

1・一　久保田米僊、黒谷金戒光明寺の方丈客殿襖絵を制作。　日出 1・29

2・5　染物業　馬渕善兵衛・阪田栄助・立木計の3人、稲畑勝太郎・三田忠兵衛・高松長四郎を招き、麩屋町御池上ル八新亭にはじめて染物業集談会を開催（染物改良についての談話会で、のち京染協会集談会と改称、毎月2回程開く）。　日出 2・5

2・23　上下各小学校の有志教員、画学校教師笠井直を招いて、画学教育についてその講演を下京3組明倫小学校で受ける。　日出 2・25、京都教育会雑誌 4

2・一　仏画工組長北村半三郎ら仏画会社を設置。　日出 2・11

3・15　2代川島甚兵衛、欧州機業地を視察のため神戸港を出帆（西陣織物を西洋に紹介するため錦織の見本を持参。主として仏国のゴブラン織工場を視察）。　日出 3・16、恩輝軒主人小伝

3・17　画学校校長心得笠井直退職。　市立美工沿革略

3・22　吉田秀穀、画学校校長となる。　市立美工沿革略

3・23　染物業集談会で京染改良および染物伝習のための講習所設置を決定（6月、石田喜兵衛、木村勘兵衛、金山藤兵衛ら創立委員となる）。　日出 3・25

4・11～5・16　京都色染織物繡纈共進会、京都博覧会場に開催[1]（はじめて、実用染織品と美術染織品を区別し陳列）。　京都博覧会沿革誌

4・13　金工　4代龍文堂没（幼名喜一郎、享年44）。　京都工芸大観

6・2　フェノロサ、祇園中村楼にて、絵画に関して講演（京都の美術史的価値と東京の新気運を比較し、京都の停滞を指摘する。これに参加した幸野楳嶺、竹内棲鳳らに刺激を与え、革新の情勢を開く。青年画家の諸団体結成や研究会の開催を後日の成果とする）。　日出 6・2、6・13～19

6・15　錦光山宗兵衛ら、洛東真葛原に美工商社を設立開業（外人向けの美術工芸品の陳列販売を行なう）。　日出 6・15

6・30　南画家　池田雲樵没（文化8・10伊賀生、東大谷に葬る）。　平安名家墓所一覧

7・一　幸野楳嶺、『楳嶺画譜』花鳥之部第一輯を上梓。　楳嶺遺墨

7・一　清水寺の絵馬中、狩野・巨勢・曽我等有名画工の作品を取外し保存するよう内達あり。　日出 7・10

7・一　京都の青年画家数名発起し、京都青年絵画研究会を設立し、規則を定める（会長を森寛斎、副会長を幸野楳嶺に、幹事長は久保田米僊に推薦し青年中より8名の幹事を撰ぶ（以下略））。　日出 7・9、8・13

8・6　森寛斎・幸野楳嶺・森川曽文・内海吉堂・久保田米僊ら京都青年絵画研究会の設立について協議。　美術研究61

8・11　京都青年絵画研究会懇親会、麩屋町八新亭に開催（幸野楳嶺・久保田米僊ら開会の主旨をつげる。まず審査長に森寛斎を推薦し、学士2名と他の審査員を投票する、富岡鉄斎（6点）、谷鉄臣（2点）、谷口靄山（9点）、重春塘（8点）、内海吉堂（5点）、原在泉（9点）、岸竹堂（5点）、国井応文（5点）を選ぶ）。　日出 8・13

9・5　京都青年絵画研究会展、祇園双林寺文阿弥に開催。[2]　日出 9・5、10、14

9・15　第2回下絵彩色模様染工組合共進会、京都商工会議所に開催（出品者は田畑喜八・平塚栄四郎ら、また職工の描いた絵画20余点を陳列）。　日出 9・17

9・17　画学校、池田雲樵の後任に投票により巨勢小石を任用。　市立美工沿革略

9・一　画学校、石版科を廃止。　日出 10・1

10・11　京都染工講習所、油小路下立売上ル近衛町に設立（この日開所式挙行。三田忠兵衛・高松長四郎・稲畑勝太郎ら教授。科目は色染応用化学・染色原理・染色原料の3科。修業年限は1カ年半、のち3年に改められる）。　実業教育50年史、稲畑勝太郎君伝、日出 10・10、10・12

10・29　幸野楳嶺・久保田米僊、皇居御造営による天井ならびに杉戸の揮毫を命ぜらる。　楳嶺遺墨、日出 10・31

10・一　宮内省、稲畑勝太郎を皇居御造営の装飾用織物および染色に関する調査方に任命。　稲畑勝太郎君伝

11・21　京都美術彫刻業組合設立認可（仮事務所下京区寺町四条下ル岡本喜兵衛方）。　日出 11・23

11・30　幸野楳嶺ら揮毫中の皇居御造営の杉戸・天井画下絵完成し府庁に提出。　日出 12・2

11・一　宮内省、佐々木清七に天皇陛下御着用洋服地の御用達を命ず（12月納入）。　京都美術協会雑誌 33

この年

▷　人形商　4代越後屋庄三郎没。　京洛人形づくし

▷　人形業者、京都玩弄品商組合を設立〔明29・京人形組合と改称、さらに明44同業組合に改組、このほか、京都指物工組合（3月）、京都絵具染料商組合（3・25）、京都漆商組合（2・13）など設立〕。　府誌下 ↗

参　　考　　日　　本

(1)　京都色染織物繡纈共進会

Ⅰ　審査員

審査長　荒川新一郎

三田忠兵衛、西村総左衛門、飯田新七、山鹿九郎兵衛、北村甚輔、広瀬治助、橋本伊助、田畑喜八、沢渡源兵衛、高松長四郎、吉本平兵衛、西村源七、辻井甚兵衛、水谷萬七、藤井清三、奥井楳吉、藤原忠兵衛、河合音七、辻忠兵衛、下村正太郎、宮本儀助、上田勘兵衛、永嶋九郎兵衛、羽野喜助、永尾徳兵衛、柊宇兵衛、小林伊之助、佐々木清七、荒木菊三郎、稲田宇八、鳥井喜兵衛、時岡利七、橋井幸七、八木清兵衛、橋本伝蔵、吉村伊之助、小川久吉、服部忠太郎、安田信造、小林久次郎、北村喜兵衛、弘田八助、木下利七。　日出 4・11

Ⅱ　受賞者

1等賞　龍紋七宝牌

繻珍織　伊達弥助、壁友仙鶴の図　飯田新七

2等賞　龍紋七宝牌中形

厚板紋織　永尾徳兵衛、繻珍　佐々木清七、天鵞絨押絵屏風　西村総左衛門、茶染　梅原久吉、各種繻絞　河本庄兵衛、刺繍屏風　西村総左衛門

3等賞　龍紋七宝牌小形

繻子　稲田卯八、倭都織　込谷松之助、糸錦　久江長兵衛、当麻織　大川半兵衛、緞子　加藤幸七、塩瀬彩色帯上　田畑喜八、平塩瀬帛紗　沢渡源兵衛、倫子本紅梅染　後藤勝之助、羽二重真黒染　木村勘兵衛、刺繍屏風　小林久次郎、刺繍屏風　田中利兵衛、緋繻絞及模様紋　種田茂兵衛、本紅紈疋田鹿秋子地　熊谷市兵衛

4等賞　以下略

特別褒賞者

永島九郎兵衛、堀川新三郎、永井嘉七、西村総左衛門　日出 5・11

(2)　京都青年絵画研究会展（審査長森寛斎、審査員富岡鉄斎、谷鉄臣、谷口靄山、重春塘、内海吉堂、原在泉、岸竹堂、国井応文、1等賞　田中一華「内侍窮途正行救助の図」・菊池芳文「菊に雀」、2等賞　藤井麦仙「夏山瀑布」、駒井龍仙「菊に雀」、遠藤速雄「夏山瀑布」、池田桂仙「夏山瀑布」、藤井曽岳「小楠公決死」、竹内棲鳳「藤房遁世」、3等賞15名）。　日出 9・14

↗　▷　西陣の織物業者有志、仏国製＜メカニック＞（ジャガード機）を模造し、同地の機屋に据え付けることを協議。　日出 4・1

▷　久保田米僊、名古屋で仙洞画塾を開く（のち渡辺秋渓これを受けつぎ仙洞画会とし、名古屋で米僊派を育てる）。　古今中京画談

▷　陶業界　五条清水に巽組合、粟田に艮組合を設立。　京焼百年の歩み

2・29　書家　巻菱潭没（弘化3生、享年41、福沢諭吉『世界国尽』の版下を書き、菱湖流が学校の書道に採用される端緒をひらく）。

4・1～5　東洋絵画会主催で東洋絵画共進会を開催。

4・15～18　鑑画会第2回大会上野池之端松原、蓬萊亭に開催（1等賞「仁王図」狩野芳崖、2等賞「弁天国」橋本雅邦、「月夜杉図」渡辺省亭）。

5・一　第7回観古美術会を築地本願寺に開催。

6・一　東洋学会を創立、第1回講演会を湯島切通麟祥院に開く。

7・2　米人画家で『An Artists Letters from Japan』の著者ラファージ来日(10月帰国)。

7・一　久米桂一郎、留学のため渡仏、ラファエル＝コランに師事。

9・11　フェノロサ・岡倉天心、美術取調委員として、欧州へ出張を命ぜられる（10月出発、明20・10・11帰国）。

11・一　旭玉山・石川光明・高村光雲・島村俊明ら、第1回彫刻競技会を開く（明20・2・会名を東京彫工会と定める。大13まで）。

この年

▷　原田直次郎、「靴屋のおやじ」制作。

▷　秋山探渕、清国に赴き徐三庚に師事。

▷　桐生に染色講習所開設。

▷　フェノロサ、ボストン美術博物館に寄託していた日本絵画千点以上をフェノロサの名を附すことを条件としてウェルド博士に売却、永久に同館に置く（なお同美術館にはビゲローおよびモールスらが持ち帰った各種日本美術品、支那絵画合計数万点が所蔵される）。

京　　都　　府

2・1　新古美術会[1]、天皇の京都行幸に際しこの年の博覧会（第15回）に代って御苑内博覧会場に臨時開催〔2・1天皇皇后行啓、27日英照皇太后行啓。府下の士族町家・寺院収蔵の古美術品及び新製作の美術工芸品を陳列。蒐集品目は古物（明治以前の内外国製品）：書・画・陶器・七宝・嵌木・刺繍・染織・金属品・漆器・建築の計1692点、新製品：画・織物・繍纈・模様染物・陶磁・漆器・七宝・彫刻・金属品・造花・扇・毛植細工・園芸品の計1298点、これまでの博覧会に比較して、特に書画が多数出品（古物943点、新製品174点）されていることが注目される。その中には府画学校出品の油画・鉛筆・灰筆・擦筆画等がある。会場内に御前揮毫の筵を設置、森寛斎、田能村直入、幸野楳嶺、鈴木百年、巨勢小石、望月玉泉、原在泉、鈴木松年、今尾景年、森川曽文、田村宗立、村田香谷、羽倉可亭ら13人が揮毫。また鬼国窯・治鋳・陶器・友禅染・摺扇等の工程実演が天覧台覧される。なお2・9～23に一般の縦覧が許可される。〕　日出　1・18～、京都博覧会沿革誌

3・8　京都博覧会社、新古美術会の光栄を記念して記念牌ならびに記念状の授与式を博覧会場に挙行（授与人員452人、内記念牌113人、記念状339人）。　京都博覧会沿革誌

3・29　画家　国井応文没（享年55、川端三条檀王寺に葬る）。　京都名家墳墓録

4・11　如雲社、創立20年祝賀会正阿弥などに開催（故社員の遺墨展観や鈴木百年、谷口靄山、富岡鉄斎、岸竹堂、重春塘、望月玉泉、原在泉、森川曽文、幸野楳嶺、久保田米僊、森寛斎らの作品180余点を陳列）。　京都美術　42

4・一　富田誠、富田幸七につき蒔絵修業をはじめる。　府庁文書　明44-48

4・一　3代飯田新七、皇居造営の窓掛壁張などの織物を山城丸にて納入東上する。　高島屋135年史

5・15　京都陶器会社、伏見深草本町19丁目に設立（米国向け実用陶磁器を製造、仏国ウォール製の設備をそなえる。社長山添直次郎、支配人丹羽圭介、技師長佐藤友太郎。また瀬戸より井上延年らの名工を雇入れる。明32解散）。　日出　9・8、京都貿易史

5・15　仁和寺殿堂炎上。　京都美術協会雑誌　125

6・22　京都織物会社、川端荒神口に設立（7・1　旧織殿の地所建物および機械設備などの払下願書が府に受諾許可される。稲畑勝太郎、近藤徳太郎、高松長四郎は同会社に技師として入社。明23・4開業式挙行）。　稲畑勝太郎君伝、京都貿易史

6・一　京都染工講習所、新町蛸薬師下ル百足尾町に移転。　実業教育50年史

7・1　便利堂、貸本および小売業として創業（明38コロタイプ印刷、昭2原色版も行う、昭16便利堂（株）設立、昭19審美書院を合併）。　日本出版100年史年表

8・12　篆刻家　羽倉可亭没（寛政11・3・16生、享年89、深草稲荷社南に葬る）。平安名家墓所一覧

8・一　皇居御造営御用品の美術品につき以下と契約（西村総左衛門、紹美栄祐、岸竹堂、幸野楳嶺、久保田米僊、並川靖之、飯田新七、小林綾造、金谷五郎三郎、高橋道八、伊達弥助、大橋庄兵衛）。　日出　8・11

8・一　京都織物会社、同社重役浜岡光哲の欧米実業視察に際し、稲畑勝太郎、近藤徳太郎、高松長四郎らを主任技師として同行派遣（仏国リョンで所要機械の購入と技術職工の雇用について契約）。　稲畑勝太郎君伝

9・4　望月玉泉ら平安百景会を設立（2カ年で洛中洛外の名所を描き会員に分つ）。　絵画業誌　6・10

9・15　鈴木百年、松年の塾展を開催。　日出　9・15

9・一　画学校、応用美術科設置を府に上申。　市立美工沿革略

10・一　京都染工講習所、京都染物組合附属となる。　稲畑勝太郎君伝

11・20　七宝焼組合設立（粗製濫造防止のため発起人　錦光山宗兵衛、同業者120人ら）。　日出　11・20

12・9　陶工　丹山青海没（享年76、西福寺に葬る）。　京都名家墳墓録

12・22　幹山陶器会社設立。　日出　明21・9・21

この年

▷　陶工　2代小川文斎没。　京都工芸大観

▷　2代川島甚兵衛帰国。　恩輝軒主人小伝

▷　初代浅見安兵衛、独立して五条坂に土焼を始める。　京都工芸大観

▷　安本宗七、細幅織物用に四幅装置のバッタンを案出、これによりネームを製織。　西陣史

▷　石田有年、『鮮血遺書』（加古義一編、ビリヨン師校閲）の挿画を銅版製作、また大阪の天主堂から発刊された『日本廿六聖人致命略伝』の巻頭「廿六聖致命之図」も銅版製作。日本銅版画志

▷　竹内棲鳳、画塾を開業する。　日本美術年鑑　昭18

▷　皇居御造営の杉戸・天井画完成（岸竹堂杉戸「杉に白孤」「刈田に群雀」、幸野楳嶺　杉戸「山吹」「芍薬」天井「四季草花」、原在泉杉戸「伊勢物語二条女御花宴図」、杉戸「蒐」「薄花」久保田米僊杉戸「不老長春図」「金衣百子図」天井「四季草花」、鈴木百年、田能村直入らが揮毫）。　日出　8・11、楳嶺遺墨、京都美術協会雑誌　50

参　　考

(1)　新古美術会御買上品

天皇の御用品

絵画「池水波静図」羽田月洲、「御苑暁雲図」長谷川玉純、「猿猴図」長尾周峰

刺繍「瀑布図額及慈鳥図額」西村総左衛門、「桜花図懸幅製」西村総左衛門

前綵「花籠盛」北村喜兵衛

陶器「粟田窯花瓶」錦光山宗兵衛、「粟田窯花瓶」帯山與兵衛

銅器「菓子盆」宮部篤良、「酒盞二個」金谷五郎三郎、「巻煙草入」紹美栄祐

友禅「鵜図扁額」田中利兵衛

絲細工「狗二頭」並川清右衛門

皇后の御用品

刺繍「虎図屏風一双」・「白鷺図扁額」・「桜花図懸幅」西村総左衛門、「桜花図ハンカチーフ」・「牡丹図ハンカチーフ」下村正太郎

織物「金茶地洋服地」西村治兵衛、「松葉色地洋服地」下村正太郎、「縮緬ハンカチーフ三打」飯田新七、「肩掛二枚」直木栄助

陶器「金襴模様花瓶一対」錦光山宗兵衛、七宝「平戸製鳥籠一対」安田源七、蒔絵「描金料紙硯筥及琺瑯塗巻煙草入」稲垣孫兵衛、「琺瑯塗巻煙草入及食器」稲垣孫兵衛

絲細工「狗四頭」並河清右衛門

皇太后宮御用品

織物「洋服地二領」西村治兵衛、「縮緬袱子五筥」飯田新七、「肩掛地」直木栄助

染物「縞縞袱子二枚」村尾小太郎

磁器「髯洗二打」帯山与兵衛、「片口七套」清水六兵衛、「珈琲飲具一打」谷口芳之助

絵画「七菜図」望月玉泉、「飛霞流鶯図」幸野楳嶺

銅器「火炉」中川浄益、「菓子器二個」宮部篤良

絲細工「猫及猴」並河清右衛門、「剪綵花」奥田弥助、「剪綵花」高木源兵衛

天皇献上品

「鬼国窯楕円形香炉」並川靖之、「百和香四筥」熊谷久三、「刺繍友禅染袱子2枚」西村総左衛門、「天蚕絲製御踏台」野口覺兵衛、「製茶5種24罐」山城製茶会社、「縮緬地ハンカチーフ5品」飯田新七、「銀匙」紹美栄祐、「御前製薬窰3套盃」陶器職工人、「摺扇子柄」塚本儀助、「合作画3葉」京都府画学校、（絵画「竹雞図」など3葉）田能村小虎、「四神図双幅」望月玉泉

皇后宮献上品（略）　京都博覧会沿革誌

日　　本

1・一　書き方改良会が左頭右尾の横書を提唱。

2・一　雑誌『絵画叢誌』創刊（『東洋絵画叢誌』を改題、東雲堂発行、大6廃刊）。

3・25～5・25　東京府工芸品共進会、上野に開催（洋画の出品も受けることになり、浅井忠、「農夫帰路」、「寒駅霜晴」（妙技2等）を出品、高橋由一・小山正太郎らも出品、荒木寛畝・大庭学仙・川端玉章・柴田順蔵らも受賞）。

3・一　東洋絵画展覧会、横浜に開催（東洋絵画協会主催、1等は幸野楳嶺、野村文挙、今尾景年、2等に岸竹堂、「寒月図」竹内棲鳳ら）。

4・24　細川潤次郎の「裸体美術論」、『龍池会報告』第24号に載る（わが国最初の裸体美術論のひとつ）。

7・12　洋画家山本芳翠、仏国から帰国（明21芝桜田本郷町に生巧館画学校を創立）。合田清も共に帰国（明13渡仏、西洋木版術を伝える）。

7・一　洋画家原田直次郎、独国から帰国（明17・2出発、同21本郷に画塾鐘美館を開く）。

8・14　彫刻家長沼守敬、伊国から帰国（明14・3・5出発）。

9・一～明21・2　バルセロナ万国発明博覧会開催（京都より田中利七、飯田新七、西村総左衛門、並河靖之、錦光山宗兵衛、帯山与兵衛、紹美栄祐、伊東陶山ら出品、優賞を受賞）。　京都貿易史

12・4　竜池会を日本美術協会と改称（『日本美術協会報告』創刊）。

12・一　浅井忠、柳源吉と共著で『A pictorial museum of Japanese manners and customs』を出版。

この年

▷　小山正太郎、十一字会の研究所を吸収し不同社を拡張。

▷　普通教育図書、教科書も鉛筆画手本に代って毛筆画手本が用いられる。

▷　八王子に織物染色講習所開設。

▷　金沢工業学校開設。

▷　狩野芳崖、「不動明王」製作。